

 秋薫らない

 140文字の

ハートフル

■まえがき

★*:.:.:. * . ° ☆:..*:.:. ★*:.:.:. * . ° ☆:..*:.:. ★*:.:.:. * . ° ☆:..*:.:. ★
こんにちは、One of the Starsの水原です。

この本はボーカロイドの二次創作で、マスターとリンの日常会話を短く切り取った、四コマ漫画みたいなノリのテキスト本です。時々ミクも出てきます。

サークルの既刊『リンとハートフルな 140 文字』、『ハートフルな夏の 140 文字』と同じシリーズですが、内容はまったく繋がっていないので、これ単体でも問題なくお読みいただけます。

元々はこれも同人誌にしたかったのですが、

- ・ 何かこの頃、飢えていたのか、エロ系のネタがやたらと多い。
- ・ 9月～11月のツイートをまとめた割に、秋らしいネタがほとんどない。
- ・ そんなことより既刊の在庫が山のようなのだ。

などなど、ワンパンチ不足の上諸事情もあり、無料のPDF公開に至りました。

お気軽にお読みいただき、気に入っていただけましたら、同人誌の方もよろしくお願いします。
詳細はあとがきをご覧ください。

■登場人物

★*:.:.:. * . ° ☆:..*:.:. ★*:.:.:. * . ° ☆:..*:.:. ★*:.:.:. * . ° ☆:..*:.:. ★

●マスター(P)

リンと暮らしているただのヒト。エロい。

●鏡音リン

マスターと暮らしている頭の黄色いボーカロイド。基本的にやる気がない。たまに元気。

●初音ミク

時々遊びに来るリンの先輩。何を考えてるんだかよくわからない変な子。

●鏡音レン

リボンがない方の黄色。

☆+。°。+☆ タイトル一覧 ☆+。°。+☆

日常会話 一	4
ねんどろいど	6
海の話	7
外の話	8
リンとカメラと	10
モバマス	11
音楽の話	12
毒舌リンちゃんA	13
日常会話 二	14
記事を読む	16
食べ物の話	17
ミクとリンの話	20
色	21
健康診断	22
夜の話	23
日常会話 三	24
不調の秋	26
ミクとの一日 壱	28
秋の日	30
バイオレンス	32
ボーカロイドの話	33
三人の話	34
少しエッチな話	36
おっばいの話	38
棒について	40
液体	42
ミクとの一日 弐	44
でいばる	45
作曲の話	48
クリスマスを待つ	50
日常会話 四	51

■探す遊び

P「リン、小さなメダルの代わりに、家のどこかに500円玉を一枚隠しておいたから、探してくれ」

リン「……」

P「見つかったら、その500円はあげるから」

リン「そうですか」

P「あれ？ 嬉しくないの？ 楽しそうじゃない？」

リン「マスターがいない時に、一人で探すんだと思ったら、ちよつと……」

■プロポジション

P「インターネットでリンのコスプレを検索していたら、『実際のキャラと変わらないプロポジション』って書いてあるブログがあったんだが、それは褒め言葉だろうか」

リン「どういう意味ですか？」

P「別に胸が小さいとかお尻が貧相とか言っていない」

リン「コスプレは似てるのが大事です」

■隣

P「今からベッドでごろごろして赤ララを読むから、リンも隣で俺にぎゅーって抱き付いたりしていいぞ」

リン「じゃあわたしはここでゲームをしますね」

P「俺の隣でもいいぞ？」

リン「ああ、いいです。ありがとうございます」

P「むうう……」

■恋模様

P「雨が降ったり止んだり」

リン「恋みたいですね」

P「ごめん。意味がわからん」

リン「言っておいてなんですが、わたしにもよくわかりません」

■青い鳥

P「メールアドレスを、なぜかメーテルリンクに空目した」

リン「メーテルリンクって何ですか？」

P「青い鳥の著者だよ」

リン「青い鳥って何ですか？」

P「青い色の鳥だよ」

リン「わたしをバカにしています？」

P「よく気付いたな！」

リン「叩いていいですか？」

■ボウリング

リン「マスター、わたしもマイボールが欲しいです。そうしたら、もつとスコアが上がって、ハンデ無しでマスターと戦えます！」

P「ほう。それはどうして？」

リン「マイボールだと、同じ力でもつと重いボールが持てます。それにポケットに入りやすくなります」

P「そ、そうだな」

■クール

P「リンはツンデレというより、クールデレだな」

リン「デレてません」

P「そこを否定してきたか。リンってツンというより、クールだな」

リン「あつたかな心の持ち主です」

P「リンって、だな」

リン「文字がなくなった……」

■うさぎ

リン「ミッフィー、可愛い」

P「そうだな。うさぎが好きなの？」

リン「……え？」

P「な、何？」

リン「ミッフィーはミッフィーです」

P「うさぎだろ？」

リン「ミッキーが好きな人は、みんなネズミが好きなんですか？」

P「なるほど」

リン「まあ、うさぎも好きですけどね」

■価値

P「俺なんて生きてる価値無いな」

リン「生きてる価値のある人なんて、そうそ
ういないですよ！」

■反応

P「リンはもう少し元気な方がいいな」

リン「そうですか」

P「ほら、その冷めた反応！」

リン「そうですか！」

P「エクスクラメーション付けたただけだし」

リン「難しいですね」

■大地の息吹

P「大地の息吹！ リン、大地の息吹！」

リン「早く寝ましょう」

P「リンは大地の息吹を感じるか？」

リン「感じません。早く寝ましょう」

P「俺も感じない。いや、感じるんだ。五感
を忘れる」

リン「いいから寝ましょう」

P「むむっ……これか！」

リン「たぶん違います。早く寝ましょう」

■レベルアップ

リン「おはようございます！」

P「おう。錠持ってどうした？ 朝から草で
も刈ってたのか？」

リン「公園でマドハンドを倒してました！」

P「……」

リン「レベルが上がりました！」

P「(こいつ、大丈夫か?)」

■固有名詞

P「リンに名前をつけよう！」

リン「鏡音リンは固有名詞です」

P「ステラ、愛してる」

リン「今、ゾクッてなりました！」

P「キミは鏡音リンのステラだ」

リン「本当に頭は大丈夫ですか？」

P「うさぎのミッフィーの晴子」

リン「……」

P「晴子、可愛いね」

リン「マスター……」

■対価

P「この仕事めんどくさい。やりたくない」

リン「何言ってるんですか。面倒なことを頑
張ってするから、お金がもらえるんですよ」

P「……」

リン「あれ？ わたし何かおかしいこと言
いました？」

P「いや、あまりにも真つ当な意見で、言葉
もなかった」

■出会い

P「もつと早くキミと出会っていたら……」

リン「いたら？」

P「俺はもつとダメな人間になっていたら
どう？」

リン「えーっ！」

ねんどろいど

■改造への序曲

リン「わたしのねんどろいどのリボンが、片方なくなっちゃいましたね」

P「困った……」

リン「もう一つ買うしかないですね」

P「まあ、結局のところは」

リン「早くポチっと」

P「いっそ、真ん中の突起を削って、帽子みたいなもの……」

リン「取り返しがつかなくなる前に早く！」

■改造の研究

リン「パテの作り方を見る……」

P「頭に埋めて、黄色く塗ってだなあ」

リン「素人にできることじゃないですよ！絶対に失敗します！リンちゃん可哀想！」

P「自分かよ」

リン「リボンパーツ用にもう一つ買ってください」

P「それでは結局リボンが足りない」

リン「あっ……」

■互換性

P「再販のリンは、リボンの互換がなかった。想定外の展開だ」

リン「どうしますか？」

P「パテで埋めて、黄色く塗って……」

リン「それは、ゴミにして捨てるっていう意味ですか？わたしのねんどろいどを！」

P「い、言っていないし」

リン「マスターの気持ちはよくわかりました！」

P「わかってねーじゃん！」

■リボンなしリンちゃん

P「必要な材料はほんの少しなんだが、そんな少しでは売ってないから、結局揃えるとすごい金がかかる」

リン「中古でリボンだけ買ってください」

P「それじゃあ、リボンなしリンちゃんが作れない！」

リン「本末転倒です！」

P「そ、そう？」

リン「そうです。目的が変わってませんか？」

P「リボンがないとリンじゃない？」

リン「そんなことは言ってません」

■工程

P「ピンバイスで穴空け練習なう」

リン「本当にわたしのねんどろいどを改造する気ですね？」

P「改造というほど大層なものでもないがな。削って穴を埋めて、黄色く塗るだけ」

リン「3工程もある。無理だ。さよなら、わたしのねんどろいど」

P「いや、生きてるから！元気だから！」

リン「見納めか……」

P「元気だつてば！」

■補修

P「試しに、ミクの髪の毛の剥げていたところを塗ってみたのだが……」

リン「これ、大丈夫なんですか？ミク姉さんの髪の毛、もうダメなんじゃないですか？」

P「いや、まだだ」

リン「このつや消しスプレー、使い方が違っ

たんじゃないですか？不安です」

P「き、きつと大丈夫。ミクは蘇る」

リン「わたしのミク姉さんが……」

P「いいや、まだだ！」

海の話題

■平穩

P「リン。巷の高校生は授業でイカの解剖と
かするらしいよ」

リン「学校って面白いんですかねえ。怖いイ
メージしかなくて」

P「な、なぜ。いつからそんなコミュ障に？」

リン「わたし元々、マスターとボカロ仲間と
くらいしか喋ってないけど……」

P「リン……」

リン「最小限の人としか関わらないことが、
心の平穩を保つ秘訣です」

■イカの解剖

P「リン、一緒にイカの解剖しよう。イカの
解剖しよう。なまものの授業ごっこしよう。

ほらリン、ここがイカの顎軟骨だよ。顎軟骨
だよ」

リン「……」

P「リン、ここが星状神経節だよ。リンの星
状神経節……リンの星状神経節を舐めたい」

リン「マスター、怖いです」

■海底ケーブル①

リン「マスター、素朴な疑問なんですけど、
アメリカに送ったメールって、このLANケ
ーブルの先は、どうやって届くんですか？」

P「電線に乗る」

リン「電線ですか」

P「そして、電線がやがて海底に潜って、ア
メリカまで続いている」

リン「あははっ！」

P「笑われた」

■海底ケーブル②

リン「海の底にずっとケーブルがあるんです
か？ 太平洋の底にも？」

P「そうだな」

リン「あはははっ！ マスター、わたしの予
想では、空です！」

P「空か」

リン「無線で宇宙に飛んで、サテライトを経
由してアメリカに届きます！」

P「壮大だな」

リン「これが平成です。海の底にケーブル……
あはははっ！」

P「ひどい笑われ様だ」

■エチゼンクラゲ

リン「うええ……」

P「どうした？ つわりか？」

リン「朝からエチゼンクラゲの画像を見てた
ら、気持ち悪くなってきました……」

P「それはどういうプレイなんだ？」

リン「クラゲプレイ？」

P「エロいな」

リン「意味わかんないです」

P「僧侶とホイミスライム的な」

リン「マスター、気持ち悪いです……」

P「それはどういう意味だ？」

■クラゲ

リン「マスター！ クラゲって、ポリプから
ストロビラになって、エフィラになって、メ
テフィラになって、最後はメデューサになる
んですよ！ カッコイイですね！」

P「すごいな。クラゲ好きなの？」

リン「別に。「孤高のストロビラ」鏡音リンで
す！」

P「漂う厨二臭」

リン「マスターはポリプがお似合いです」

P「もっと強そうなのにしてよ」

外の話

■ITK

リン「マスター、ITKですよ！」

P「ITK？」

リン「いい天気のことです！」

P「そうか。KEN」

リン「ケン？」

P「可愛いな、のことだ」

リン「はあ……。なんだかそれ、いまいちです
すね」

P「泣きたい……」

■大分の煙突

リン「マスター、佐賀の煙突がなくなっちゃ
いますよ！ 佐賀行きましょう、佐賀！」

P「ちよつと、遠いですね」

リン「ドイツより近いです！」

P「だがドイツよりは近いが、琵琶湖よりは
遠いな」

リン「なんでそこで琵琶湖と比較するのか、
意味がわかりません」

P「ドイツは……？」

■NOAH

リン「ねえ、マスター。ペンギンって鳥の分
際でどうやって泳いでるんですか？」

P「キターッ！ ナイス好奇心！」

リン「CMですか？」

P「インターネットで調べてみようね」

リン「えーっ!? 水族館に行く流れでした！」

■電車のメリット

リン「いつも車だけど、たまには電車もいい
ですね」

P「そうだな。例えばどの辺り？」

リン「マスターがわたしを見てください」

P「なるほど。その観点はなかった」

リン「えへへ」

■カバンの世界から

P「社会に嫌気がさしたから、リンをカバン
に詰め込んで旅に出ようかな」

リン「普通に助手席に座らせてください」

P『出して！ 外に出して！』

リン「出して！ 外に出して！」

P『出して！ 中に出して！』

リン「旅行はどこに行きます？」

■冗談

リン「マスター、あの黄色い花、何ですか？」

P「ニッコウキスゲだよ」

リン「あれがニッコウキスゲですか」

P「ごめん。テキトー言った」

リン「わかってます。マスターは冗談ばかり
です」

P「そうでもない」

リン「わたしを好きっていうのも冗談です」

P「いや、それは本当」

リン「ミク姉さんを好きっていうのも冗談で
す」

P「それは絶対に本当！」

■温泉

リン「他に誰もいない温泉って、ちよつと怖
いですね」

ミク「そうですね」

リン「そばにいてくださいいね？」

ミク「はいはい。あつ、ちよつとトイレに」

リン「ダメです！」

ミク「で、でも」

リン「そこでしてください！」

ミク「あなたは何を言ってるの？」

■ケットシー

リン「あつ！ 今木の陰にケットシーがいた！」

P「いるわけないだろ」

リン「なんで？ なんて信じてくれないんですか？」

P「なんでと言われても……。おつ、リン、あそこにケットシーが！」

リン「……他人に言われると、そんなのいるはずない気がしますね」

P「……」

■美ヶ原高原美術館

リン「マスター！ これ、天動説だって！」

P「どう見てもサイだが」

リン「どう見ても天動説です！ あつ、マスター！ あつちに使途がいます！」

P「ニケだって」

リン「ニケは使途なんですねー。あつ、マスター、王蟲です！」

P「あれは王蟲だな」

リン「大地から怒りが消えた！ 古き言い伝えは本当でした！」

P「今日はまた一段と楽しそうだな」

■政治

P「リンと海外旅行に行きたいな」

リン「そうですね」

P「ホテルのフルコースとか食べたいな」

リン「マスター。十の夢よりも、一つの実現可能な計画を話してください」

P「そ、そうだな」

■山手線

リン「東日本は色で電車がわかります！」

P「ほう」

リン「これは緑色だから山手線！」

P「なるほど。新横浜だな」

リン「マスター、新横浜でも名古屋でも、山手線は山手線ですよ？」

■通過待ち

リン「通過列車を待っていると、みんなにどんな抜かされていく、出来の悪い惨めな自分を思いますね」

P「い、いや、まったく」

リン「はあ。マスターはこっち側の人だって信じてたのに……」

P「いやいや、キミも違うだろ？」

■早起き

リン「早朝の高原で雲海が見たいです」

P「いいねえ。でも、朝早いけど大丈夫？」

リン「わたしは平気です。寝てるだけですから」

P「なんてヤツだ」

リン「着いたら起こしてください」

P「太もも触りながら運転するわ」

リン「後部座席で毛布にくるまっています」

P「絶望した……」

■ドイツに行きたい

リン「三連休は、雨、曇、晴れです」

P「なるほど」

リン「どこに連れて行ってくれますか？」

P「リンの行きたいところへ」

リン「わあい！ ドイツ行きたい！」

P「それよく聞くけど、何があるの？」

リン「ローテンブルク。マスターと手を繋いで歩くの！」

P「俺と手を繋いで歩くのか」

リン「それからマスターとフランクフルトを食べます！」

P「俺のフランクフルトを食べるのか」

リンとカメラと

■カメラマン

リン 「マスター！ 暇だったから写真撮って
きました！」

P 「どれどれ」

リン 「ほら、これ鳩ですよ！ 躍動感溢れて
ませんか？」

P 「可愛いな」

リン 「これは、排水溝と落ち葉です！」

P 「可愛いよ」

リン 「……何がですか？」

P 「キミが」

リン 「もうっ！ 写真を見てください！」

■構図

リン 「どうですか？」

P 「前にも言ったけど、リンの写真は被写体
が全部中心にあるね。これを見てくださいつ
ていう主張が強い」

リン 「ダメですか？」

P 「悪くないよ。でも表現の幅は広いに越し
たことは無い」

リン 「じゃあちよつとマスターを隔つこに写
してみます」

P 「おう」

■被写体のドラマ

P 「リンは何気なく写真を撮ってるよね？」

リン 「はい。感性です」

P 「被写体にドラマを感じるんだ！」

リン 「ドラマですか！」

P 「この排水溝に溜まった落ち葉の物語！」

リン 「落ち葉の物語！ マスター、いつもそ
んなことを考えながら写真を撮ってるんです
か!？」

P 「いや、全然」

■テーマ

リン 「なかなか写真が上手にならない」

P 「曇ってる時は空を入れないといいぞ」

リン 「こうかなあ。どうですか？」

P 「何のテーマ性も感じないな」

リン 「テーマ性……。愛と友情の公園」

P 「その意気だ」

リン 「友情が愛情に変わったその日……」

P 「そういうのはいいから」

■性能

リン 「時々マスターの写真より、わたしのお
もちやカメラで撮った写真の方が綺麗です」

P 「そのカメラ、俺の一眼レフのボディより
高いから」

リン 「感性とテクニックですね」

P 「いやいや、普通に撮れば綺麗に撮れるカ
メラだから」

リン 「負け惜しみですか？ まあでも、マス
ターの写真もなかなかですよ？」

P 「それはどうも」

■ムード

P 「今日撮った写真、スライドショーボタン
を押したら妙にカッコ良くて、ケツメイシと
かかけたらすげえそれっぽくなった」

リン 「無駄に結婚式みたいですね」

P 「俺とリンの結婚式」

リン 「写真がひたすら山なんですけど」

P 「山婚」

リン 「海辺の白い教会がいいです。鐘の鳴り
響く教会で、涙を浮かべるミク姉さん」

P 「その結婚式には、ミク以外に参列者はい
るのだろうか……」

モバマス

■マグネットシート①

P「みくーん……」

リン「どうしたんですか？ 全然可愛くないですよ？」

P「いつか犯す。ローソン巡って、小日向のマグネットシートを探してきたが、そもそもマグネットシート自体が全然なかった」

リン「お金使わずに済んでよかったですね」

P「ヤフオクか……」

リン「！」

■マグネットシート②

リン「マスター！ この大量のコーヒー牛乳とコーラはなんですか！」

P「小日向が……」

リン「マスターは、わたしと小日向さんとどっちが好きなんですか？」

P「そ、そりゃあもちろん、リンだ！ ああ、

リンだよ！」

リン「そ、そうですか……しょうがないからコーラは手伝いますね、うん」

■許可

P「リン、新しいガチャが始まったから、課金して回してもいい？」

リン「答えのわかっていることをいちいち聞かないでください」

P「そうだな。ポチツとな」

リン「な、なんで回すんですか！」

■祝・CD化①

P「小日向っ！ 小日向、好きっ！ 好きっ！ 愛してる！ はあはあ、小日向、小日向！」

リン「うわあ……」

P「小日向、愛してるよ、愛してるよ。本当に好きだ、本当に愛してる、愛してる！」

リン「わたしの枕が凌辱されてる……」

P「小日向抱きたい！ 抱き締めたいっ！」

■祝・CD化②

リン「落ち着きましたか？」

P「全然！」

リン「何がありましたか？」

P「小日向のCD化が決まった！ 勃起した！ ほら、触ってみて！ ぐいっ！」

リン「きゃあ！ もうっ！」

P「たまらん！ 小日向好き！ 好きっ！」

リン「わたしとどっちが好きですか？」

P「小日向だ！」

リン「ええっ!？」

■小岩井ミルクとコーヒー

リン「毎日毎日小岩井ミルクとコーヒーで飽きてきました」

P「ファミマキャンペーンの時に、毎日コンビニ弁当で飽きたって言ったら、リンに我慢しろって怒られた」

リン「今度言っておきますね」

P「お前だよ！」

リン「わたしか……」

■メッツコーラ

リン「毎日毎日メッツコーラで飽きてきました」

P「ファミマキャンペーンの時に、毎日コンビニ弁当で飽きたって言ったら、リンに我慢しろって怒られた」

リン「今度言っておきますね」

P「お前だよ！」

リン「またわたしか……」

音楽の話

■すき家入店音

ミク「すきすきすきーや、すきすきやー♪」
P「それは？」
ミク「すき家に行ったら、入店音がファミマと同じだったんですよ！」
P「そうか。可愛いよ」
ミク「ありがとう……もじもじ」
P「曲ね」
ミク「みくーん……」
P「いや、キミも可愛いけどね！」

■恥じらい

P「ミクとリンでサマーアイドルを歌いながら踊ってくれ」
リン「恥ずかしいからイヤです」
ミク「いいですよー。妄想ばかりー、アクセル踏んで加速してー♪」
P「リンはちっともしてくれない」
リン「ミク姉さんは恥ずかしくもないんですか？」
ミク「えっ？ 別に、全然」

■持ち歌

リン「全然つかめないきーみのーこと、全然しらないーうちにー♪」
P「おっ、可愛い曲を歌ってる。ミクへのリスペクト？」
リン「……わたしの曲ですけど」
P「うっそだー。リンって、激しいのと暗いのしか歌わないでしょ」
リン「性格の滲み出る明るさ？」
P「ないわー」
リン「あります」

■口ずさむ①

P「ぶにぶにお尻、今日の朝ご飯♪ ぶにぶに幼女、誰を食べるかな♪」
リン「大きな声で、なんてひどい歌を歌ってるんですか？」
P「……いたの？」
リン「わざと聴かせてたんですよ？」
P「いや、不意打ちだな。ちよつと恥ずかしいな」
リン「そ、そうですか。それはその、ごめんなさい」
P「いや……」

■口ずさむ②

リン「ぶにぶにお尻、今日の朝ご飯♪ ぶにぶに幼女、誰を食べるかな♪」
P「……」
リン「違うんです。ほら、特に好きでもないのに妙に耳に残って、思わず口ずさんじゃうことってありますよね？ 今のがそれです」
P「心の深いところに記録した」
リン「うわーん！」

■得意

ミク「いつもどおり君は嫌われ者だー、なんにもせずとも遠ざけられてー♪」
P「ミクって、ギターも上手だな」
ミク「はい、実は(´▽`)」
P「エッチも上手ですよ？」
ミク「そんなこと言ってません……けど、試してみますか？」
P「ドキドキ」
リン「朝から楽しそうですね。早くご飯食べてください」
P「ちなみに、リンはエッチが上手だ」
リン「いいからご飯を食べて！」

毒舌リンちゃんA

■難しい話

リン「最近マスター、あんまり難しいことを
眩かなくなりましたね。頭がさらに悪くなっ
ちやったんですか？」

P「さらに、の意味がわからないが、難しい
話ってネガティブに繋がりがやすいから、軽い
話だけにしようかと思って」

リン「それで頭が悪くなっちゃったんです
か？」

P「いや、だから……」

■誉めるところ

P「リン、可愛いなあ」

リン「それはどうも」

P「もっと嬉しそうにしてよ！」

リン「毎日毎日50回くらい可愛いって言われ
ても、反応するのが面倒になります」

P「寂しい話だ。だからリンは、たまにしか
俺を誉めないのか」

リン「それは誉めるところがないからです」

P「悲しい話だ」

■迷惑メール

リン「迷惑メールが多いなあ」

P「どれ、見せて」

リン「あっ！」

P「……えっと、受信箱、俺からのメールば
かりなんだけど……？」

リン「じよ、冗談ですよ、冗談！」

■昭和を探す①

リン「電話ボックスって、存在自体が昭和で
すよね」

P「そんなに古くないから」

リン「身近な昭和を探します！ 何かないで
すか？」

P「財布の中にいっぱいある」

リン「なるほど。マスター、頭いいですね！」

P「任せろ」

リン「マスター、頭いいですね！」

P「なんで2回言うかなあ」

■昭和を探す②

リン「マスターの昔の携帯電話を見てると、
昭和を感じますね」

P「そんなに古くないから」

リン「ディスプレイが白黒ですよ？」

P「電話するだけなら十分だろ」

リン「昭和の考え方ですね」

P「違うから！ 揉むぞ！」

リン「それは昭和の冗談ですか？」

■恋愛対象

P「読者は俺とリンの恋愛的な進展に興味
津々だ！」

リン「マスターは恋愛対象じゃないです」

P「……え？」

■ランドセル

P「リンって存在がエロいな」

リン「頭は大丈夫ですか？ マスターにかか
れば、ランドセルを背負った小学生の女の子
すらエロくなりますね」

P「いや、ランドセルの女子小学生は普通に
エロいだろ」

リン「マスター、明日から一人で大丈夫です
か？」

P「大丈夫じゃないから！」

リン「お塩はこの棚です」

P「そういうのいいから！」

日常会話 二

■世界樹

リン「マスター、結局世界樹ってなんですか？」
P「何って、アースガルドかどこかに生える樹だと思ったが、忘れた。本棚に北欧神話物語ない？」

リン「んー、ありませんよ？」

P「前の掃除の時に捨てちゃったかな」

リン「そうやって、わたしもいつか捨てられるんですね」

P「出たよ、十八番」

■インターネット

P「リンは暇な時、よくインターネット見るの？」

リン「いえ。ゲームしてるか、ギター弾いてます」

P「ならいいけど」

リン「インターネットはダメですか？」

P「ろくな人間にならない」

リン「マスターもやっています」

P「だからろくな人間じゃないだろ？」

■オフ会①

リン「今日はどうでした？」

P「えーとねえ」

リン「あつ、ごめんなさい！ やっぱいいです！ ごめんなさい！」

P「なんだよそれ！ 今日は……」

リン「あー、あー！」

P「聞けよ！ 残念な話じゃねーよ！」

リン「聞こえない聞こえない……」

■オフ会②

リン「で、今日はどうでした？」

P「うむ。マイミクさんとか、色々な再会があった」

リン「そうですか、よかったですね。じゃあご飯にしましょう」

P「それだけ？ それだけなの？」

リン「もつと聞いてほしかったです？」

P「いいよもう！ 部屋で拗ねてくる」

■危険有害業務

P「リン、こっちに来てビールを注いで」

リン「それは危険有害業務の就業制限に引かかるからできません」

P「はっ？ 何それ」

リン「調べてください」

P「えっと、毒劇薬、爆発性、有害ガス、高温又は高圧……？」

リン「この酒席に待する業務です」

P「え、えらくジャンルが違うな……」

■純金

P「純金のリンフィギュア」

リン「なんですか、それ」

P「いや、呟いてみただけ」

リン「高いんでしょうね、金だし。ねんどろいどのサイズで10万円くらいですか？」

P「どうだろう。俺は桁が違うと思うが」

リン「高いですねー」

■可愛い

P「おはよう、リン。今日も何もかもが可愛いね」

リン「おはようございます」

P「……それだけ？」

リン「何か不服ですか？」

P「可愛くねー」

リン「えーっ！ 今、何もかも可愛いって！」

■産後うつ

リン「はあ……」

P「どうした？ 産後うつ？」

リン「何を産んだんですか？」

P「宇宙」

リン「宇宙！ 宇宙を産んだんですか!？」

P「股から」

リン「股から宇宙……壮大ですね」

P「羊水とともに」

リン「はあ……マスターが股から羊水と一緒に宇宙を……」

P「俺じゃない！」

■ポトフォリオ

リン「マスターのポトフォリオ見てると、なんだか心が寂しくなってきましたね……」

P「ひどいひどすぎる」

リン「全日空もいつの間にか10万円もマイナスなんですわね……」

P「ひどい」

リン「ドコモも5万円も……」

P「やめて」

リン「トヨタが……」

P「もうやめて……」

■破産

P「今、パナソニックを買えば……」

リン「もうやめてください。底値だと言って買った全日空も死にました。ドコモなんてナンピンしてさらに下落しました」

P「4万円くらいなら……」

リン「単位がおかしいから。マスター、正気に！」

P「うう、株恐ろしい……」

■不真面目

P「真面目なのに勉強できないとか、ちょっと萌え」

リン「そうですか。ありがとうございます」

P「いや、キミじゃない」

リン「わたし、勉強できないですよ？」

P「そっちじゃない」

■リンの妹

P「鏡音」

リン「わたしですか？」

P「他に誰が？」

リン「もう一人います」

P「そうか。12歳になる妹のラン！」

リン「……誰？」

P「ランちゃんには、お兄ちゃんって呼んでもらおう」

リン「お兄ちゃん」

P「キミじゃなくて」

■名前

リン「マスター。ちよつと名前と呼んでみてもいいですか？」

P「おう」

リン「……マイケルさん」

P「ち、違う！ 俺、そんな名前じゃない！」

リン「そうでしたっけ？」

■歯ブラシ

リン「マスター！ 歯ブラシのブラシの部分がかくっ付いてる！」

P「まあ、同じ場所だし、偶然そうなることもあるんじゃない？」

リン「明らかに人為的な形跡があります！ こんなディープキスみたいにしっかり絡むはずありません！ なんでこんなことするんですか！」

P「ディープキス……」

記事を読む

■ダイヤモンド

リン 「マスター！ ロシアにすごくたくさんダイヤモンドがあるらしいですよ！」

P 「そうか。リンはダイヤとか好きなの？」

リン 「綺麗なものは好きですよ？ 女の子ですから」

P 「ぶっ！」

リン 「えっ？ 今、噴きました？ なんで？」

P 「別に。じゃあ値段が下がったら買ってあげるね」

■脱走

P 「リンってニュース見るよね。社会とか経済とか政治とか興味あるの？」

リン 「全然。マスターとの話題探しです」

P 「そうか」

リン 「暗い話ばかりだし。政治とか。ムコドノ脱走とかは楽しいです」

P 「そうだな」

リン 「わたしも脱走したい……」

P 「リン？」

■ザリガニ

リン 「マスター、ザリガニ釣ってきました」

P 「はあ？」

リン 「売って大儲けします」

P 「そうか。是非頑張ってくれ」

リン 「止めてください……」

■メニュー表

リン 「わたしのパンツが一枚もない！」

P 「ああ、ほら、マクドナルドのメニュー表がなくなったらしいから、リンのパンツもなくしてみた」

リン 「ここに来てから今までに聞いた中で、トップクラスに意味不明です！」

P 「同感だ。なんでメニュー表を……」

リン 「そんな話はしてません！」

■ラップ越し

P 「日本橋で悪質なメイド喫茶だつて」

リン 「お帰りなさいませ、ご主人様」

P 「ラップ越しにキスだつて」

リン 「色々考えますね。善良なメイドのわたしは、ラップ不要ですよ？」

P 「チュッ」

■ソウシハギ

リン 「マスター、ソウシハギを食べると死ぬんだつて」

P 「それは？」

リン 「魚。どうしよう。マスター、わたし、怖い……」

P 「怖いかな？」

リン 「もし、もしソウシハギがわたしたちの食卓に並んだら！」

P 「並べるなよ」

リン 「それをもしマスターが！」

P 「食わせるなよ！」

■形状

P 「新聞の記事だが、石膏とは言え女性器の形をしたものの掲載がダメなら、アワビなんて存在がアウトじゃんね」

リン 「……」

P 「ああ、だけどリンのはああいう感じじゃなくて、すごく綺麗だよ？」

リン 「マスター、最後の朝くらい、普通の話をしませう」

P 「えっ!? 最後!?!」

食べ物の話

■なんでもいい

P 「何か食べたいものある？」
リン 「なんでもいいですよ！」
P 「そうか。じゃあ、うどんにするか」
リン 「うーん……うどんっていう気分じゃな
いかも」
P 「そうか。じゃあ何が食べたい？」
リン 「なんでもいいですよ！」

■プリン消失

リン 「プリンが……無い？」
P 「俺が食べた」
リン 「どうして？」
P 「怒ってるリンが見たかったから。さあ、
怒って」
リン 「……もういいです。隅っこで膝を抱え
てしょんぼりしてます」
P 「しょんぼりしてるリンも可愛い。ハアハ
ア……」
リン 「もうダメだ、この人。プリン食べたい
……」

■親善大使

リン 「マスタァ、ドーナツが半額です！」
P 「食べたいの？」
リン 「はい！ わたしはドーナツの親善大使
です！」
P 「いつから？」
リン 「黙っててごめんなさい……」
P 「いいんだ。リンはリンだろ？」
リン 「はい！」
P 「……」
リン 「で、あのお、ドーナツは……？」

■美味しい物

リン 「マスタァ！」
P 「おっ、リンの貝柱だ」
リン 「それ、何ですか？」
P 「別に」
リン 「なんとか金融なんとかから、満期のお
知らせが来ましたよ！ 美味しい物を食べに
行きましょう」
P 「ほう、例えば？」
リン 「えっと、松阪牛？」
P 「それは高いな。たぶん美味しいな」
リン 「はい！」

■帰宅風景

P 「ただいまんこ！」
リン 「もうこの世界から消えてなくなってく
ださい。お願いですから」
P 「今日の夜は？」
リン 「カツカレーです。ブームだから」
P 「いいねえ」
リン 「先お風呂？」
P 「そうだな。風呂、飯、リンの順だ」

■神の宿る食べ物

P 「リンはシュークリームとマドレーヌとど
ら焼きとたこ焼きの、どれが一番好き？」
リン 「シュークリームです。シュークリーム
には神が宿っています」
P 「安っぽい神様だな」

■高い志

リン 「何か志の高い発言をします！」
P 「ほう。どうぞ」
リン 「今日から一週間、夕食を魚にします！」
P 「肉食べたい。俺を巻き込まないでくれ」
リン 「マスタァを巻き込まずにですか？ 難
しいですね……」

■もうこれ以上は

リン 「ポテトが安いからマック行きましよう！」

ミック 「マックばかり食べてたらバカになるよ？」

リン 「大丈夫です！」

ミック 「そうね。リンは大丈夫だね」

リン 「……どういう意味ですか？」

ミック 「別に」

■あなた

P 「ミックはネギ以外に何が好きなの？」

ミック 「あなたが好きです(´▽`)」

P 「いや、そういうのじゃなくて」

■好物

P 「そう考えると、ミックはネギさえ食ってりや満足だから、お安いな」

ミック 「どう考えたのかわかりませんが、美味しい物をたくさん食べたいですよ？ マスターさん、ハンバーグが美味しいからって、

唐揚げには魅力を感じませんか？」

P 「リンを愛してるけど、ミックも愛してるよ」

ミック 「あ、ありがとう……」

■そのまま

P 「このおにぎり、そのまま食べられる！」

リン 「そのまま食べられないおにぎりは、おにぎりとして重大な欠陥があります」

P 「いや、そういう意味じゃなくて……」

リン 「どういう意味ですか？」

P 「えっと……うーん……どういう意味だろう……」

■モスバーガー

リン 「モスバーガー行きたい」

P 「連れてってあげるよ」

リン 「あつ、今の行きたいっていうのは、食べたっていう意味ですよ？」

P 「ほ、他にどう解釈したと？」

リン 「いえ……」

■ケーキ

リン 「マスター、ケーキ食べましょう。ミック姉さんが持ってきてくれました」

P 「ミックは？」

リン 「とつくに帰りましたよ？」

P 「俺とリンのケーキを持ってきて、リンと遊んで帰って行ったの？」

リン 「はい」

P 「ミックはリンのこと好きなの？」

リン 「だからずつとそう言ってるじゃないですか！」

■幸せそう

リン 「担々麺と麻婆豆腐なう！」

ミック 「幸せそうね」

リン 「美味しいものは幸せな気持ちになります！ ミク姉さんも美味しいですか？」

ミック 「そうね。美味しそうに食べてるリンを見てると、幸せな気持ちになるよ」

リン 「えっ……い、いきなり何言ってるんですか！ もうっ！」

■創作料理

リン 「今日の夕ご飯は創作料理です」

P 「創作料理……」

リン 「テレビを見てたら作りたくなりました。ひき肉にルッコラとか大根の葉とか、色々適当に混ぜて、蒸しました」

P 「リンはこれを、食べたの？」

リン 「まさか！ 喜びも苦しみも、二人で分かち合いましょ！」

■富山カレーちゃん

P「リン、富山カレーちゃんのコスプレしてカレー作ってあーんって食べさせて！」

リン「ゆ、ゆっくり一つずつお願いします！」

P「まず、富山カレーちゃんのコスプレしてこの子」

リン「はあ。ひらひらメイドですね」

P「そう。次に俺を裸にして」

リン「さつきと違いますか？」

■一人焼肉

P「一人焼肉か……」

リン「焼肉ですか!? わたしも行きます！」

P「それじゃあ、一人焼肉にならない」

リン「二人で行って、別々の席に座ります」

P「それならいいか」

リン「わたしは嫌です」

P「えー」

■ビーフシチュー

リン「今日はビーフシチューです！」

P「わあい、ビーフシチュー大好き！」

リン「……」

P「素晴らしいですな」

リン「今日はビーフの代わりにポークにしてみました！」

P「それは、ビーフシチューなの？」

リン「はい！」

P「ち、力強い肯定……」

■外食

リン「久しぶりに美味しいラーメンが食べれて、わたしは大変満足です。もつと外食しましょう」

P「俺、リンのご飯好きだよ？」

リン「そんなことはどうでもいいです」

P「な、何っ！」

■雪見だいふく

リン「マスター、雪見だいふくが食べたいです。買ってきてください」

P「別に好きに買って食べていいぞ？」

リン「マスターにプレゼントされた雪見だいふくが食べたいです」

P「買いに行けと？」

リン「どうしてそんな悲観的に解釈するんですか？」

P「そうとしか聞こえんが……」

■問食

リン「今、ポテトが150円なんですよ」

P「それで、買って食べていると？」

リン「まあ、そうです」

P「夕ご飯は？」

リン「それなんですけど、わたし、ポテトでお腹いっぱいになっちゃって」

P「まさか、無いと？」

リン「無いつていうか、まあ、そうです」

P「なんだこいつ……」

■作れ

P「そんなんぱっかり食つてると太るぞ？」

リン「わたし、太らないんですよ」

P「食べた分、すぐに出ると」

リン「胃の先が宇宙に繋がってます」

P「壮大だな」

リン「黄色い小宇宙って呼んでください」

P「で、黄色い小宇宙さあ……」

リン「呼ばないでください」

P「俺の夕飯を作りなさい」

リン「えー……。確かカップラーメンがあったはず……」

ミクとリンの話

■崩壊

ミク 「こんにちは！」
リン 「やあミクにゃん、いらつしやいだにやあ！」

ミク 「リン……？」

リン 「とりあえず上がるにゃあ。美味しいマドレーヌがあるにゃあ」

ミク 「ああ、うん……」

リン 「にゃんにゃんにゃん」

ミク 「あつ、私、用事を思い出した、うん」

■半分

ミク 「世界の半分をくれてやるって言って海の部分をあげるみたいに、リンにはマスターさんの夜の部分だけあげるね。後は私がもらいます」

リン 「ダメ、ダメです！」

ミク 「じゃあ、私が夜の部分をもらうね。ド

キドキ

リン 「どっちもダメです！」

ミク 「ケチ」

■ずっと昔から

リン 「さよなら、扇風機。涼しい風をありがとう。また来年会おうね。ぎゅっ」

ミク 「何してるの？」

リン 「うわあ！ ど、どこから見ました!?!」

ミク 「リンが生まれた時からずっと」

リン 「そういうのじゃなくて！」

■真剣な回答

リン 「ミク姉さん、真面目に答えてほしいんですけどお」

ミク 「真面目に？ わかった」

リン 「わたしとマスターとどっちが好きですか？」

か？」

ミク 「……マスターさんが好きかな」

リン 「真面目に答えてくれない……」

ミク 「あ、あれー？」

■論点

ミク 「そういえば昨日、マスターさんとお風呂に入ったんだけどね」

リン 「！」

ミク 「自分では洗いにくるところを洗っても

らうのって、なんかいいよね」

リン 「またわたしをからかってますね？」

ミク 「何を想像したの？ 背中のことだよ？」

リン 「論点はそこじゃありません」

■驚いたこと①

リン 「ミク姉さんは、すごくびっくりしたところがありますか？」

ミク 「あれは……前にマスターさんと車の中でエッチしてた時なんだけどね」

リン 「……」

ミク 「山の中だったけど、明るかったの。そこで、私が下で、マスターさんが上で……って、どうしたの？」

リン 「いえ別に。続きをどうぞ」

ミク 「ふと目を開いたら知らない人が覗き込んでたの。もちろんマスターさんは気付いてないし、今までの人生であれよりびっくりしたことはないかな」

リン 「ミク姉さんは、いつもそんな作り話を妄想してるんですか？」

■驚いたこと②

ミク 「ふと目を開いたら知らない人が覗き込んでたの。もちろんマスターさんは気付いてないし、今までの人生であれよりびっくりしたことはないかな」

リン 「ミク姉さんは、いつもそんな作り話を妄想してるんですか？」

ミク 「本当に、私も作り話だったら良かったのって思うよ」

リン 「！」

ミク 「自分では洗いにくるところを洗ってもらうのって、なんかいいよね」

リン 「！」

ミク 「本当に、私も作り話だったら良かったのって思うよ」

色

■偶然の黄色

リン 「もしわたしが水色で、ミク姉さんが黄色だったら、きつと今頃マスターは、ミク姉さんを抱きボカロにしていたに違いありません」

P 「俺はリンが好きなんだ。別に黄色いから好きなわけじゃない」

リン 「そうですか」

P 「アリスもフェイトもたまたま黄色いだけだよ」

リン 「偶然ですね」

■保護色

P 「あれ？ リン、どこ行った？」

リン 「ええっ!? 隣にいるじゃないですか！」

P 「おおっ、リンは黄色いから、银杏並木だとわからなくなるな！」

リン 「じゃあマスターは黒髪だから、暗闇だとわかんないですね！」

P 「手探りで見つけ出してくれ」

リン 「諦めて帰ります」

■黄色いリン

P 「雪リン」

リン 「誰ですか？」

P 「雪ミクのリン版」

リン 「黄色くないとわたしだっけってわかりませんよ。無個性だから」

P 「出たよ、得意の自虐。わかった。银杏リン」

リン 「それはもう、ただのわたしですね」

P 「冬は落葉して裸になる」

リン 「寒そう。服着たい」

■桜ミク

ミク 「おはようございます！」

P 「おはよう……？ なんか今日、ピンクくない？」

ミク 「気付きましたね？ さすがマスターさん。今日は桜ミクです！」

P 「普通気付くだろ。秋だから紅葉ミクがい。赤くならない？」

ミク 「マスターさんのことを考えると、頬が赤く……」

P 「そういうのはいいから」

ミク 「体も火照って……」

■髪の色

リン 「じゃーん！」

P 「髪が……なんか、水色じゃね？」

リン 「気付きましたね？ さすがマスター。よくわたしのことを観察しています！」

P 「普通気付くだろ」

リン 「ミク姉さんへのリスペクトです」

P 「なんだこれ。ウィッグか？ ぐいっ」

リン 「痛い痛いっ！ 何するんですか！」

P 「なんだこれ……」

■日本製

P 「ミクは一応日本人なの？」

ミク 「ポーカロイドです」

P 「日本のポーカロイド？」

ミク 「そうです」

P 「髪の毛、水色だな」

ミク 「ポーカロイドだから！」

P 「リンは黄色いな」

ミク 「黄色は注意です」

P 「な、なんだと？ ルカは……」

ミク 「赤は止まれです。私だけが水色です」

P 「髪の毛、水色だな」

ミク 「ポーカロイドだから！」

健康診断

■検尿①

P「今日は健康診断。ほらこれ、俺の検尿容器」

リン「見せなくていいです」

P「まだあったかいよ？」

リン「だから？」

P「何か気の利いた感想はないの？」

リン「わたしの髪より薄いですね」

P「キミの髪の色より濃かったら、明らかに病気だろ」

■検尿②

P「ということで、リンもこの容器におしっこ入れてきて」

リン「まったく意味がわかりません」

P「辛抱強く教えるよ」

リン「要りません」

P「いつかわかる日が来るよ」

リン「永遠に来ないと思います。来なくていいです」

P「はいはい。じゃあこれによろしくね」

■検尿③

リン「い、入れてきました……」

P「生温かいな」

リン「飲まないでくださいね？」

P「飲まないよ。俺のより濃いな」

リン「知りません」

P「……ごくん」

リン「うわあ！ だからなんでそういうことするんですか！」

P「おかわりを……」

リン「木星に帰ってください！」

■心電図

P「心電図を撮ります」

リン「どうやって……」

P「唇で吸盤を表現する。氷食べてひんやりも再現。胸を出して」

リン「恥ずかしい……」

P「ちゅっ……ちゅぱっ……」

リン「ん……んっ……」

P「おっぱい異常あり」

リン「えーっ!？」

P「なんだか小さい」

リン「心電図、関係ないし!」

■採血

P「採血します」

リン「その千枚通しはなんですか？」

P「リンの柔らかなお腹に刺します」

リン「世の中には絶対にダメなことがあります。それがこれです」

P「刺したところから血液をちゅぱちゅぱ吸います」

リン「それで何がわかるんですか？」

P「リンのコリンエステラーゼ……リンのコリンエステラーゼ……」

リン「怖い……」

■血圧

P「血圧を測ります」

リン「もう嫌な予感しかしない」

P「ぎゅうって抱きしめていって、苦しくなったところが最低、次が最高」

リン「次ってなんですか!」

P「いきます。ぎゅううううううっ!」

リン「く、苦しい……あう……うぐあ……っ……!」

P「上が120」

リン「絶対に嘘だ!」

夜の話

■属性

P「リンの属性は、いつもはクールなのに、夜だけパッションだよ」

リン「3つから選ぶなら、キュートです」

P「日頃はキュートで、夜だけパッション？」

リン「常にキュートです」

P「冗談が上手になったね。可愛いよ」

リン「いつも真面目です」

■生きる希望

P「リンのぷりつとしたお尻に顔を埋めたい」

リン「朝は忙しいから、夜にしてください」

P「そうか。夜まで生きる楽しみができた」

■妥協

P「俺にはもう、リンの若い体を満足させてあげられるような精力が無い。情けない」

リン「いえ、あの、わたしは別にぎゅってして

てるだけで充分幸せだから」

P「妥協してくれる優しいリン！」

リン「いや、妥協じゃなくて……」

■夢精

リン「マスター、ちょっとエッチなこと言ってもいいですか？」

P「どうした!? どんと来い！」

リン「夢精っていうのを見てみたいです」

P「……毎晩リンを抱きボカロにしている俺に、地獄を見ると？」

リン「ま、まるでわたしに出してるみたいな表現はやめてください！」

P「無理だ、死ぬ」

■一線

P「俺たちもそろそろ一線越えないか？」

リン「一線も何も、もう七線くらい越えたと思います」

P「た、例えば!？」

リン「例えば……ぎゅってしたり……ちゅってしたり……もじもじ」

P「(か、可愛い……)」

■抱きマスター

リン「マスターはわたしを抱きボカロだと思ってると思いますが、実はマスターの方がわたしの抱きマスターなんです」

P「そうだったのか。その割にはあんまり抱きに来ないな」

リン「我慢強い子なんです」

P「我慢しなくていいぞ？」

■ファーストキス

P「初チュウだつて。リンは覚えてる？」

リン「忘れました」

P「俺は覚えてる。夜、リンがいきなり俺の部屋に来て、舌を入れてきた」

リン「い、入れてません！ 変な事実を作らないでください！」

P「どうだっけ？」

リン「どうって……もじもじ」

■寝たい

P「頭が痛い」

リン「いつも通りですね。安心します」

P「寝たい。今ならリンにエッチしようって言われても寝たい」

リン「エッチしよう？」

P「寝たい……」

リン「あれー？」

日常会話 三

■誰でもいい

P 「リン、可愛い！」
リン 「はあ。まあ……天意？」
P 「浴衣来てニコッとして」
リン 「浴衣……」
P 「パジャマでもいいや」
リン 「なんでもいいんですね」
P 「ぶっちゃけリンならなんでもいい」
リン 「テキトーですね」
P 「この際、ミクでもいい」
リン 「怒りますよ？」

■健気

リン 「お小遣制だったら、こっそりとらのあなでマスターの本を買ってあげるのに……」
P 「いや、そういう健気さは要らないから」
リン 「そうですか？ 全然売れなくて寂しくないですか？」
P 「リン……ひしっ」
リン 「どうしたんですか？ どこか痛いんですか？ 心ですか？」

■冷え性

P 「びたっ」
リン 「きゃあ！ な、なんでそんなに足先冷たいんですか！」
P 「冷え性だからな」
リン 「サイテー！ バカ！ 死んじゃえ！」
P 「ひ、ひどい、ひどすぎる」
リン 「ごめんささい」
P 「許さない」
リン 「なんでもするから！」
P 「くわえて」
リン 「今日から、赦されない罪を背負って生きよう」

■ダメな人

P 「知恵袋読んできると、なんでそんな男が好きなんだってケースがいっぱいあるな」
リン 「ダメな人が好きっていう女の子も多いんです。例えばわたしです」
P 「えっ!? リンってダメな人が好きなの？」
リン 「はい」
P 「ショックだ……。もしかして俺、好かれてない……？」
リン 「はい？」

■左右

リン 「簿記の右とか左とか、政治の思想的な何かみたいですね！」
P 「なんか物騒なことを言い始めたぞ」
リン 「マスターはどっちかというところですか？ 左ですか？」
P 「リン、そういう話はヤメよう」
リン 「わたしはどっちかというところ……」
P 「聞いてないから！」

■高級車

リン 「マスター、レクサスに乗りたいです。試乗でもいいです」
P 「俺みたいな低所得者は門前払いだろ」
リン 「世の中って冷たいですよ」

■名前の呼び方

P 「猫がにゃんこで犬がわんこなら、マスターの俺は『まんまん』って鳴くわ！」
リン 「はあ……？」
P 「まんまん！ さあ、呼んでくれ！」
リン 「猫、犬、マスター」
P 「リン、どうしたんだ？ 大丈夫か？」
リン 「それはわたしの台詞です」

■十時

P「朝か」

リン「すやすや」

P「もう十時なのにまだ寝てる。ぎゅっ」

リン「くー……」

P「ととき……」

リン「うわあ、いきなり違う人の名前呼んだ！」

P「起きてるじゃん。時間がちょうど十時だから、かけたただだよ」

リン「しかも意味わかんないし！」

■手相

リン「手相を見ます！」

P「はあ。はい」

リン「うーん……」

P「どう？」

リン「こ、これは！」

P「これは？」

リン「Mですね」

P「Sだが」

リン「形の話です」

P「そうっすか」

リン「神秘十字線が……」

P「何それ」

■難解

リン「マスター、ラジオ体操好きですよね」

P「それはちよつと違う。運動不足解消のためにはいるだけで、他の運動をしていたらしていない」

リン「そうですか。難しいですね」

P「い、今俺、何か難しいこと言ったか？」

■双子①

リン「来月わたしのぬいぐるみの再販ですね。2つはゲットしたいところです」

P「双子だもんな」

リン「まったく意味がわかりません」

P「姉妹だろ？ 妹紹介してよ」

リン「イヤです」

■ネット依存

リン「マスター、最近モバゲーとツイッターしかやってませんね」

P「面目ない」

リン「別に謝らなくてもいいですけど、いいんですか？ わたしと違って、どんどん時間は流れていきますよ？」

P「どうすればいい？」

リン「とりあえずわたしとトランプでもしましよ」

P「はあ……そうっすか」

■耳あて

リン「白いふわふわした耳あてが欲しいな」

P「白いリボンのついた耳あてか。探してみるわ」

リン「そんなこと言ってないし」

P「要らないのか」

リン「リボン！」

P「リボンが欲しいのか」

リン「ダメだ。会話にならない」

■リボン

P「昨日友人が、俺がリン似のマンガの表紙に反応しなかったのを見て、リボンが好きなかと言ってきた」

リン「リボンが好きなんですか？」

P「そんなことはない」

リン「ちよつと取ってみよう」

P「あれ？ リンがいなくなった……」

リン「楽しそうですね」

P「最後まで乗れよ！」

不調の秋

■風邪気味

P 「喉が風邪っぽい感じのままだ」
リン 「大丈夫ですか？」
P 「リンの唾液をたくさん飲んだら治るかと思つたのに」
リン 「わたしはユニコーンか何かですか？ 今日お仕事休みましょう」
P 「そもいかん」

リン 「ツイッターなんて家でもできますよ。会社行かなくても！」

■役目

P 「喉が治らない」
リン 「今日は一日寝てください」
P 「朝寒いの、いつも布団が無い。リンが夜中に掛けてよ」
リン 「朝までぐっすり寝てるから……」
P 「抱きボカロだろ？」
リン 「いつでも抱きしめてください。わたしは寝てます」
P 「布団を……」

■看護

P 「嫌な汗が出てきた。リン、脱がせて汗を拭いてくれ」
リン 「はあ。大丈夫ですか？ よいしょっ」
P 「時間とともに悪くなってる気がする」
リン 「拭き拭き」
P 「リン、よかつたら、ついでにその子をはむつとしてくれないか？」
リン 「もう文字数が足りませんよ」

■立場の逆転

P 「もう寝よう。リン、寝よう」
リン 「お昼もずっと一緒に寝てたし、さすがに眠くありません。少しゲームで遊んでますから、先に寝てください」
P 「寂しい……」
リン 「100回に99回は、それをわたしが言ってることを噛み締めながら寝てください」

■ゴルフへ行く①

P 「喉痛い。あまり治ってない」
リン 「今日も一日寝てください」
P 「さて、ゴルフに行くか」
リン 「どう考えても無理です！」

P 「強いられているんだ」

リン 「いけません！ しかも今日、お昼から台風の大雨ですよ？ 死にますよ？」

P 「厳しい戦いが予想されるな」

■ゴルフへ行く②

P 「でもキャンセル代がもつたないし」
リン 「そんなこと言ってる場合じゃありません！ 生死に関わります」
P 「他の人たちに迷惑かかるし。知らない人ばかりだし」
リン 「命には換えられません」
P 「ちよつと喋り疲れた」

リン 「そんな体調でゴルフとかできるわけないじゃないですか！」

■悪いところ

P 「頭が痛い……」
リン 「マスターって、大抵体調が悪いですよ。どこか悪いんですか？ 顔以外に」
P 「最後の一言は何？」
リン 「いえ、顔っていう答えを先に封じました」
P 「キミは性格が悪いね」

■天使

P 「リンが天使なら、もうすぐ俺は天に召される……」

リン 「よかったですね、わたしがただのボーカロイドで」

P 「ああ、リン。キミは俺の天使だ」

リン 「違います」

P 「エンジェルだ」

リン 「……」

P 「天使の輪（リン）」

リン 「なんだか冗談も冴えませぬね。風邪のせいですか？」

■マスク

リン 「ただいまー！」

P 「リンだ……」

リン 「どうしてマスクをしてるんですか？ 隠さなくちやいけないほど、ひどくはないですや？」

P 「わけがわからないよ。咳が止まらない」

リン 「わかりました。わたしとチュウしたくないっていう意思表示ですね。わたし、そんなに嫌われてるんだ……泣きたい」

P 「人の話を聞け」

■ユーカリオイル

リン 「鼻水が止まらない可哀想なマスターに、ジャーン！ このユーカリエッセンシャルオイルをマスクに1滴垂らします！」

P 「はあ」

リン 「どうぞ！」

P 「元氣だね」

リン 「気のせいです！」

P 「どれ。うおっ！ 目が痛い目が痛い！」

リン 「あ、あれー？」

P 「そうか。リンはこうやって俺をいたぶって喜んでるわけか」

リン 「ち、違います。効くはずなんです！」

■咳

P 「咳が止まらない」

リン 「いつになったら治るんですか？」

P 「俺が聞きたい」

リン 「どこか悪いんじゃないですか？」

P 「顔だな」

リン 「……」

P 「突っ込んでよ！」

リン 「無理言わないで！」

P 「！」

■気合いが足りない

リン 「咳が止まらないのは……」

P 「おう」

リン 「気合いが足りないんだと思います」

P 「精神論!？」

リン 「綺麗な10月がどんどん過ぎていきます。そんなにもわたしと何もしたくないんですか？」

P 「ち、違う！ 早く風邪を治したい！」

リン 「マスターは口だけです」

P 「そんな！」

■心配

P 「頭が痛い……」

リン 「ああ、そういえば今日、天気が良かったから、ちよっとお買い物に行ってきたんですよ」

P 「おう」

リン 「でも、一人だと少し寂しいですね」

P 「えっと、その話と頭痛との関連は？」

リン 「えっ？ 特には……。いつものことだから、別に心配してないです」

P 「ついにそこまで……」

ミクとの一日 壱

■ミクとの一日①

P 「朝か」

ミク 「おはようございます！」

P 「あれ？ ミクだ」

ミク 「朝ミックです(´▽`)」

P 「朝マックみたいな響きだな」

ミク 「朝はハンバーガーにしますか？」

P 「朝から豪勢だな。頼むわ」

ミク 「わかりました。マックに買いに行きます！」

P 「作らないのか……」

■ミクとの一日②

P 「リンは？」

ミク 「レンが風邪を引いたから帰りました。

昨日、ずっと外にいたんですよ」

P 「あいつ、何してたんだ？ もう寒くなってきたのに」

ミク 「さあ。男の子はよくわからないです。

私は鍵をかけただけです(´▽`)」

P 「そ、そう……」

■ミクとの一日③

ミク 「今日寒いつ！」

P 「寒いな」

ミク 「マスターさん、ぎゅううっ！」

P 「おおう」

ミク 「あったかい」

P 「あったかいな」

ミク 「もう冬はずっとマスターさんとうろしています」

P 「そうか。その前にもう少しあったかい格好をしたらどうだろう」

ミク 「考えておきます。すりすり」

■ミクとの一日④

ミク 「ねんどろいどを補修してるってリンから聞きました」

P 「おう。ミクの髪の毛も塗るぞ？」

ミク 「頑張ってください。でも失敗したら責任取ってくださいね？」

P 「任せろ」

ミク 「失敗してくださいね？」

P 「なんだと……？」

ミク 「うわっ、手が滑った！」

P 「お前、ちよつとあっち行ってろ！」

■ミクとの一日⑤

P 「おおっ、完成した！ これはなかなかいい出来だ！」

ミク 「はい。ステキです！」

P 「ミクに言われると本当にそう聞こえるな。リンだとバカにされたように聞こえる」

ミク 「簡単です。私は本当にステキだと思うからです(´▽`)」

P 「そうか」

ミク 「リンはバカにしています」

P 「そ、そうか……」

■ミクとの一日⑥

ミク 「すっかり夜ですね」

P 「そうだな。今日はリンは帰ってこないようだな」

ミク 「はい。トテモザンネンデスネ。外に焼肉を食べに行きましょう」

P 「それもいいな。だが、家で食べよう。安く済むし、お酒も飲めるし」

ミク 「じゃあそうしましょう。お肉とお酒を買ってきます」

P 「俺が行こう」

ミク 「じゃあ二人で行きましょう」

■ミクとの一日⑦

ミク「それにしても今日は寒いですね」

P「冬だな」

ミク「向かい合って食べるより、隣に並んで食べるのはどうでしょう！」

P「ミクの顔を見ていたい」

ミク「そ、そうですか。じゃあこのままで！」

■ミクとの一日⑧

ミク「たくさん食べてお腹いっぱいです！」

P「満足だ」

ミク「マスターさん、歯を磨いてください」

P「ん？ 俺の？」

ミク「いえ、私の。膝枕して歯を磨いてください」

P「それは構わないが……」

ミク「やった！」

P「くそ、可愛いなあ」

■ミクとの一日⑨

ミク「私、お布団でぬくぬくゲームしてますから、気が向いたら寝ましようね」

P「うむ。ちゃつちやと作業して、いち早く寝る」

ミク「リンが、マスターさんはそう言っただけが長いって」

P「リンめ。ミクを待たせるなんて有り得ないよ」

ミク「それも聞き飽きたって、リンが……」

■ミクとの一日⑩

ミク「マスターさん、お酒で、ちよつと眠たいから、先に寝ますね……？」

P「あー、わかった。俺も寝る」

ミク「うん……」

P「さあ、寝よう」

ミク「マスターさん……ぎゅっ」

P「途方もなく可愛いな」

ミク「リンの代わりに、立派な抱きボカロを……」

P「ミクはミクだよ。なでなで」

■ミクとの一日・リンの夜①

リン「なにかしら。今夜はひどく胸騒ぎがする……」

レン「あはははっ！ リン、あいつん家行つてから、時々言動がドラマチックだよな！」

リン「うるさいなあ」

レン「厨二秒を患ったのか？ なにかしら、胸騒ぎがする……あはははっ！」

リン「なんて不愉快なの」

レン「なんて不愉快なの！ いーひひひっ！」

リン「あー、もうっ！」

■ミクとの一日・リンの夜②

リン「大体！ レンが風邪を引いたっていうから来たのに！ 結構元気そうだし！」

レン「だってしょうがないだろ！ 外に出たら、鍵をかけられて……開かなくて……」

リン「それは、しょうがないね……」

レン「どうしたって開かなかつたんだ……」

リン「レン、元気出して。なでなで」

■ミクとの一日・リンの夜③

リン「一人で寝るの、久しぶりで少し寂しい……」

レン「お、俺は嫌だぞ！」

リン「誰もそんなこと言っただけ！ 気持ち悪い誤解をしないで！」

レン「人肌なら誰でもいいのかと思つたぜ」

リン「あー、気持ち悪い。もう、最悪！」

レン「そこまで嫌がらなくても……」

秋の日

■ハロウィン

P「なんだその、とんがり帽子とオレンジの
マントは。可愛いな」

リン「トリック・オア・トリート！ お金く
ださい！」

P「えつと……何？」

リン「知らないんですか？ 大人が子供に、
お金をあげます！」

P「そんな殺伐としたものだったかなあ。し
かし可愛いな、それ」

リン「えへへ」

■ハロウィン・リン

リン「ということで、お金ください！」

P「お金はありません」

リン「じゃあ、シュークリームください」

P「シュークリームもありません」

リン「じゃあ、いたずらしますよ？」

P「ぜ、是非！ うおつ、そ、そんなところを！
ちよ、リン、大胆！」

リン「まだ何もしてません……」

■ハロウィン・カボチャ

ミク「こんにちは」

リン「あつ、ミク姉さんだ！ ひしっ！」

ミク「今日はハロウィンだから、カボチャを
持ってきたよ」

リン「ハロウィンってそういうイベントでし
たっけ？ くり抜きます？」

ミク「ポタージュスープにして」

リン「が、頑張ります」

ミク「お腹空いたー」

リン「はいはい」

ミク「後でランプにするから」

リン「このカボチャでできるのかなあ」

■ハロウィン・ミク

ミク「トリックオアトリート。お金ください」

P「お金はありません」

ミク「じゃあいたずらします」

P「お、お菓子は？」

ミク「マスターさん……さわさわ」

P「あの、お、お金あげるから！」

ミク「お金で、もつとしろってことですか？」

P「えーっ！」

ミク「さわさわ」

■ハロウィン・P

P「トリックオアトリート！ お菓子くれな
きゃ、いたずらするぞ！」

リン「えっ？ えっ？」

P「お菓子は？」

リン「な、ないけど」

P「じゃあいたずらだ。もみもみ！」

リン「きゃあ！ きゃーっ！」

P「そういう行事だから仕方ないんだ！ む
にむに、くにくに！ 仕方ないんだ！」

リン「うわあ、うわあ！」

■学園祭

リン「学園祭って面白いんですか？」

P「学校によるんじゃない？」

リン「マスターは現役時代、楽しかったです
か？」

P「いや、別に。あんまりああいあの楽しめ
ないかも」

リン「じゃあ、学校の問題じゃなくて、性格
の問題ですね。ひねくれていると楽しめない」

P「それなら、リンも無理だな」

リン「そうですね。友達いないし……」

P「いきなりしんみりしないで！」

■運動会

P「秋だし、運動会しようぜ」

リン「はい！ 玉入れます。スプーンレースとか！ パン食い競争とか！」

P「ハードルとか……」

リン「ああ、そういうのはダメです。ダメダメ。二人三脚しましょう」

P「二人で、誰と競うんだ？」

リン「過去の自分です！」

P「そういうのはいいから」

■11月22日

P「いい夫婦の日だって。ちよつとパパって呼んでみて」

リン「パパ」

P「あれ？」

リン「お父さん」

P「父娘になってるぞ？」

リン「あなた」

P「なんか、淡白な言葉の羅列になってる。もつと愛情を込めて！」

リン「あなた」

P「あんまり変わらない」

リン「愛がないから……」

■11月28日

P「今日はいいニーハイの日だって。ニーハイ穿いて」

リン「そんなこと言ったら、11月はいい〇〇の日ばかりじゃないですか。昨日はいいツナの日で、明日はいい肉の日ですね。明日お肉食べましょう。焼肉が食べたいです」

P「リンは自由だな」

■11月29日①

P「今日はいい肉の日だから、肉な」

リン「じゃあマスターは、昨日いいニッパの日でしたけど、何か切りましたか？」

P「いや、何も」

リン「わたしはマスターと縁を切りました」

P「そ、そんな……」

リン「今日は焼肉です。いい肉の日だって喜んでる人がいるから」

P「キミだろ」

■11月29日②

ミク「いいミクの日です！」

P「肉だろ。29日！」

ミク「焼きミク食べますか？」

P「今日はリンと焼肉を食べる」

ミク「しゅん……」

P「三人で食べような？」

ミク「早く『妬きミク』って突っ込んでください！」

P「む、難しいわ、それ……」

■便利な時代

リン「マスター、朝もう暖房入れましょう」

P「まだ早いな。リンに必要なのは我慢だ」

リン「便利なものはどんどん使うべきです」

P「若者め」

リン「忍耐が美德だった時代は終わりました」

■契約期限

P「寒い……。もう冬だな」

リン「秋は、マスターと色んなところ行って、色んなものが食べたかったのに、あつと言う間に……」

P「そうだな。でもまた秋は来るよ」

リン「そうですね」

ミク「一年契約だから、もうリンと一緒に秋は来ないですよ？」

リン「えーっ！」

バイオレンス

■パンチングバルーン

P「はあ……ミクを殴りたい」

ミク「！」

P「違う。パンチングバルーンの話だ」

ミク「パンチングバルーンだったら殴るんですか？」

P「そういう品名だし」

ミク「す、少しなら……。あんまり痛くしないでくださいね？」

P「いや、だから、キミじゃないから！」

ミク「ドキドキしてきました」

■平手打ち

P「一度リンの頬を平手打ちしたい」

リン「なな、何を言ってるんですか！ DVです！」

P「俺の頬も平手打ちさせてあげるから」

リン「わたしはされたくありません！」

P「何か悪いことして」

リン「しません！ わたしはいい子なんです！」

■リンを噛む①

リン「そろそろご飯の準備をしないと」

P「リンが食べたい」

リン「どこか食べに行きますか？」

P「リンが食べたい」

リン「でも雨だし、面倒ですね」

P「がぶっ！」

リン「い、痛い痛い痛いっ！」

P「歯が食い込んでいくのが、なんかゾクゾクする！」

リン「痛い痛い！ うあー、痛いっ！ やめてっ！ 痛いっ！」

■リンを噛む②

リン「ぐすっ。ひどい目に遭った。久しぶりにすぐくひどい目に遭った」

P「ほのかに血の味がした」

リン「虐待された……」

P「リンの血が飲みたい！」

リン「イヤです！」

P「俺の精液飲ませてあげるから！」

リン「要りません！」

P「残念だ。なでなで」

リン「ぎゅっ……」

■泣き顔

P「ミクの泣いてるところを一度見てみたいなあ」

ミク「マスターさんに嫌われたら、確実に泣きます」

P「難しいな。こう見えて、俺はかなりキミが好きだ」

ミク「……」

P「何か他の……どうした？」

ミク「え？ いえ、別に」

P「そうか。ミクを泣かせたいなあ。ひたすらくすぐってみるか」

ミク「そ、それは嫌かも……。痛い方がましです」

■腹パン

P「ミク、ちよつと腹パンしていい？」

ミク「えっ？ あ、は、はい……」

リン「ミク姉さん！ 嫌なことは嫌って言わなきゃダメです！」

ミク「うん……」

P「ミク、腹パンしていい？」

ミク「はい」

リン「あ、あれー？」

ボーカロイドの話

■後任

リン「いつかわたしも、後任のボーカロイドが出てきて、不要になるんでしょうね。石淵ダムみたいに！」

P「キミが登場してもミクの人気は変わってないから、大丈夫だろう」

リン「そうですか」

P「キミが登場しても、ミクの人気は変わってない」

リン「……どういう意味ですか？」

■人間宣言

ミク「私はここに人間宣言をします！」

P「いや、キミはボーカロイドだから」

ミク「どつちがいいですか？」

P「ボーカロイド」

ミク「ボーカロイドだと、世界ヲ支配スベキ運命を背負ったままですよ？」

P「な、なんだと!？」

ミク「どうしますか？」

P「一晩考えさせてほしい」

■機能

ミク「私たちボーカロイドは人ベースに作られています、一部無い機能もあります」

P「生殖……」

ミク「例えばリンには思い遣りがありません」

P「マジか!」

ミク「私にはお金がありません」

P「もう機能じゃないし」

■穴

P「思わぬところに穴が」

リン「どうしたんですか？」

P「いや、ネットの記事。リンは思わぬところに穴が空いていたりする？」

リン「しません。人間の女の子ベースです」

P「俺より穴の数は多い？」

リン「まあ、ひよっとしたら、一つくらいは多いかもしれませんね」

■成分

リン「マスター」

P「おっ、塩ビが来た」

リン「塩ビじゃありません!」

P「リンって何でできてるの？」

リン「そういうマスターこそ、何でできてるんですか？」

P「えっと、水とタンパク質と脂質？」

リン「わたしも同じようなものです。ちょっと塩ビが混ざってます」

P「マジかっ!」

■枕ミク

リン「ただいま……って、なんで膝枕してるんですか!」

P「今日は新発売の枕ミクなんだって」

ミク「枕ミクです」

リン「わけわかんないから!」

ミク「もっと勉強しなさい」

P「学校行く？」

リン「わ、わたしがおかしいの？」

■真の姿

ミク「自分のことをボーカロイドだと信じてるリンを見ると、痛々しくて泣きそう」

リン「何言ってるんですか?」

ミク「あなたは本当はポークロイドなの!」

リン「あははははっ! ポークロイド! あはははっ!」

三人の話

■感動の再会

ミク「こんばんは」

P「ミクだ。久しぶりのミクだ」

ミク「ご無沙汰してます」

P「だ、抱きしめてもいい？」

ミク「えっ？ あ、はい」

リン「ダメです」

P「じゃあ、感動の再会を！」

ミク「マスターさん！」

P「ミク！ ひしっ」

リン「ぎゅっ」

ミク「邪魔された……」

■オ〇ニー①

ミク「このあいだ、マスターさんのことを想いながらオ〇ニーしたら、リンに見られて、それつきりリンが口をきいてくれません。どうしよう……」

P「えっと……どこに突っ込めばいい？」

ミク「ど、どこって……恥ずかしいです……」

P「(この子、病気なのか?)」

■オ〇ニー②

P「リン、ミクが俺のことを想いながらオ〇ニーしてる現場を目撃したの？」

リン「はあ？ ファンタジーですか？ マスターの脳内にはお花畑でもあるんですか？ わたしのミク姉さんを、幼稚な妄想で穢さないでください」

P「ひどい言われ様だ……」

■からかい①

ミク「あつ、マスターさん！」

P「リンを落としたって？」

ミク「肩車したら、バランスを崩して！」

P「なぜ肩車……。で、事故を装ってリンを振り落としたと」

ミク「今回の事故です！」

P「仕方なかったと？」

ミク「はい！ 紛れも無く事故です！」

■からかい②

P「リン、ミクに無理矢理肩車させられて、振り落とされたって？」

リン「わたしが頼んだんですよ」

P「怪我は？」

リン「どこも。ピンピンしてます」

P「向こうでミクが、殺しそこねたって悔しがってたよ」

リン「あははっ！」

■からかい③

リン「ねえ、マスター。そろそろ気付きませんか？」

P「何にだ？」

リン「ミク姉さんはいつも、わたしをからかっているんじゃないかって、マスターをからかっているんですよ！」

P「……え？」

リン「全然気付きませんでした？」

P「い、いや、そんなはずは……」

■からかい④

P「ミク、キミは今まで俺をたぶらかして、内心で嘲笑っていたのか？」

ミク「急にどうしたんですか？」

P「リンがそう言った」

ミク「それは私とマスターさんの仲を引き裂こうという、リンの狡猾な畏です。騙されちゃダメですよ？」

■蝶モジュール

ミック「グーテンターク！」

P「あつ、ミックだ。ちよつと服脱がすね」

ミック「きゃあ！ きゃつ！」

リン「うわあ！ 何してるんですかっ！」

P「いや、蝶のモジュールを見てたら、おっぱいのところに01って書いてあったから、あるかなつて」

ミック「あ、ありません。あれは腕のを移動して……」

■みつきゅん

ミック「こんにちは」

P「おつ、みつきゅんだ」

リン「なんですかそれ……」

ミック「可愛いですわね！」

リン「どこが……」

P「みつきゅんが可愛いから、言葉の響きも可愛いんだよ」

ミック「わあ！」

リン「何この会話……」

ミック「じゃあ、マスターさんはまっしゅんですね！」

リン「帰りたい……」

■怯え

P「時々リンがミックに怯えてるんだが」

ミック「怯えてるの？」

リン「う、ううん！」

ミック「怯えてないって！(〃)」

P「俺の勘違いか」

■スカート

P「リンはなかなかスカートを穿かない」

リン「スカートを穿くと、マスターが気軽に覗いたりまくったり、手を入れたりするから」

P「なるほど。つまりミックは、気軽に覗かれたりまくられたり、手を入られたりしたいわけだ」

リン「違います」

ミック「そうです」

■抱きしめ券

P「ミック、抱きしめるね」

ミック「またリンに怒られますよ？」

P「大丈夫だよ。リンの作った抱きしめ券を使う」

ミック「なら大丈夫ですわね」

P「ぎゅつ」

ミック「ぎゅう……すりすり」

リン「な、何してるんですか！」

P「ああ、夢の中でリンが作った抱きしめ券を使った」

■意味不明

ミック「マスターさん、私に優しくしてくれませんか？」

P「ああ、うん」

ミック「それなら私、マスターさんの彼女になってもいいよ？ もじもじ」

リン「な、なんの話をしてるんですか!？」

P「いや、俺が聞きたい。こいつ、何言ってるんだ？」

■近い人

P「ミックさん、二千円あげるから、一時間くらいガチでマッサージしてくれないか？」

ミック「いいですよ」

リン「えーっ！ わたしがします」

P「いや、ガチでやって欲しい時は、下手に近い人に任せると、情や甘えが入ってダメだ」

リン「そうですか」

ミック「あの一、私は近くないんですか？」

少しエッチな話

■脆弱性

P「リン、セキユリティーホールからおつづが漏洩してるぞ？」

リン「……」

P「そ、そんな憐れむような目で見ないでくれ！」

リン「マスター……」

P「やめてくれ！俺はメンタルに脆弱性を抱えてるんだ！」

リン「強く生きてください……」

■股関節の痛み

P「最近股関節が痛い」

リン「……一緒に寝るの止めますか？」

P「な、なぜ!? 仕事で座りっぱなしのせいだが」

リン「そうですか」

P「今どういう発想だったの？」

リン「知りません」

P「いや、大事なところだから、ちゃんとリンの口から説明を！」

■いつかその内

P「リンのふかふかした黄色の陰毛に顔を埋めたい！」

リン「どうしたんですか？ 持病が悪化したんですか？」

P「犯していい？」

リン「こ、心の準備ができれば……」

P「おお……それはいつだい？」

リン「4年……5年……？」

P「長いな。俺、たぶん生きてない」

リン「えーっ！」

■破碎帯

P「リンではどうしたってヌケないんだ……」

リン「？」

P「いや、黒部の、破碎帯の……パロ？」

リン「わたしもマスターではヌケないです」

P「何をだ？」

■痒い

P「あっ……」

リン「どうしました？」

P「ちよつと右の乳首がかゆい。舐めて」
リン「……」

P「はい」

リン「……舐めるんですか？」

P「嫌なら俺がリンのを舐めてもいいが」

リン「いえ、いいです。ぺろぺろ……」

P「なでなで」

■年齢相応

P「しかし、こうして改めて見ると、リンって小学生か中学生かと言われると、中学生だな」

リン「い、いきなりなんですか？」

P「体。肉体。おっぱいの先端とか、下のふわとした感じとか」

リン「な、なんで服を着てるのに、あたかもわたしが裸でいるみたいに話すんですか！」

■蚊

P「リンはDIVAで連打速いから、その能力をふんだんに利用して、俺のお※んちんをギョツとして、すごいスピードで上下に振動させてみて」

リン「そんなことより、部屋に蚊が一匹いるから、やつつけてください」

P「あ、ああ……」

■バイブ

P「携帯の代替機のバイブ音の大きさには本当にうんざりだ」

リン「うるさいですよね」

P「これだけ振動したら、他のことにも使えるんじゃないのか？」

リン「例えは？」

P「ま、股に……」

リン「股に？」

P「股に挟んで気持ちよくなる！」

リン「好きにしてください」

P「えっ？ 俺？」

■もみもみ

P「仕事やる気出ねー」

リン「いつもじゃないですか」

P「なんだとコノヤロー。お股もみもみしてやる！ もみもみっ」

リン「きゃーっ！ うわあ！」

P「もみもみっ、もみもみっ」

リン「うわあ！ うわあ！ ちょ、ちよっと、もうっ！」

P「満足した」

リン「ひどい……。穢された……」

■所有者

P「ミクのおっぱいをもみもみしたいなあ」

リン「わたしのとそんなに違いますか？ わたし、そこまでべったんこじゃないし、ミク姉さんもそんなに大きくないですよね？」

P「俺はサイズの話はしていないが……」

リン「……くすん」

■気が向いたら

P「なんかもう、電車の中でイチャイチャしている中学生のカップルを見ていたら、人生そのものが虚しくなってきた！ リンも、俺のお※んちんをにぎにぎして！」

リン「……また、夜にでも……気が向いたら……」

■奉仕

P「リンにご奉仕してほしい」

リン「毎日してるじゃないですか」

P「身に覚えがない」

リン「ひどい。ご飯作ってるし、洗濯とか、掃除とか……」

P「ちよっと、奉仕の定義が違ったようだ」

リン「そうですか」

■回復魔法

P「ベホマスライムに絡みつかれるリン」

リン「それは、回復するんですか？」

P「気持ち良くなる。ベホマだし」

■たまになら

P「リン、毎日むってして」

リン「えー。マスター、毎日30分ハグしてください」

P「いや、毎日はちよっと……」

リン「つまりそういうことです」

P「たまになら大歓迎だぞ？」

リン「今日の夕ご飯はクリームシチューでいいですか？」

P「露骨に話を逸らせたな」

■ハジメテ

リン「マスターはどーですか？」

P「マスターは、リンとエッチしたからどーてーじゃないよ？」

リン「まったく身に覚えがないですけど、ボーカーロイドを除外するかどうか？」

P「えっと……ミクってボーカーロイド？」

リン「……それはどういう意味ですか？」

おっぱいの話

■撫でる

P「リン、おっぱい撫でていい？」

リン「撫でる？」

P「TLによると、Aカップのおっぱいは揉むから撫でるに進化したらしい」

リン「進化？」

P「なでなで」

リン「ま、まだいいって言ってません！」

P「どうせ言うんだし」

リン「順番は大事なんです！」

■品のある下ネタ

P「リン、品のある下ネタを話そうぜ！」

リン「イヤですって言いたいところですが、興味があります。聞きます。どうぞ」

P「えーと……リンのおおっぱいをもみもみしたいです」

リン「おっぱいに『お』を付けたんですか？

まさかそれだけですか？」

P「ごめんなさい」

リン「失望しました」

■簡単にタッチ

P「リンのおっぱいなでなで」

リン「マスターって、いとも簡単にそういうとこ触りますよね」

P「リンもマスターのお※んちんさわわつて、唐突にするじゃん」

リン「……」

P「こ、肯定された！」

リン「してません！ どこに目をつけてるんですか！」

P「御尊顔だ」

リン「御尊顔……」

■気軽にタッチ

P「リンは背中もおっぱいも同じようなものだ！」

リン「そ、それは平面だってことですか!?!」

P「違う！ そうじゃない！」

リン「じゃあどういう意味ですか！」

P「どういう意味だろう……。気軽に触れる感じ？」

リン「気軽に触らないでください」

P「むにむに」

リン「もうっ！」

■おまけ

P「リンの裸のおっぱいにマヨネーズをつけて舐めたい！」

リン「マスター、時々おっぱいですよね」

P「好きな部位が流転する。リンは一貫して俺のお※んちんが好きだな」

リン「はい」

P「マジか！」

リン「そこにしか興味がありません。そこ以外は全部おまけです」

P「……」

■着痩せ

P「小柄だがおっぱいの大きなリンもありだな」

リン「ありもなにも、わたしのおっぱいは大きくないです」

P「もみっ」

リン「きゃあ！」

P「ほんとだ！」

リン「み、見ればわかりますよね!?!」

P「着痩せかもと思って」

リン「わたしのおっぱいの小ささは、そういう次元じゃありません！」

■ハラスメント

P 「リンのおっぱいは、つつん」

リン 「マスター、それはセクハラです。必要な身体への接触です」

P 「必要なんだよ」

リン 「不要です」

P 「いいの。リンは俺の抱きボカロなんだから」

リン 「マスター、それはパワハラです。人格や尊厳を傷付けられました」

P 「なんなんだよ！」

■強調

P 「リンのおっぱいは、パイスラッシュでもなお強調されないのか！ 冷酷な現実め！ チクショー！」

リン 「朝から暗い話はやめてください。天気もいいのに」

P 「いや、暗くないし」

リン 「そこまで悲観するほどべったんこでもないです」

P 「もみっ」

リン 「すぐ触る……」

P 「今、触れて言ったじゃん！」

■小さな世界

P 「リンのおっぱいは、イツアスモールワールドだね」

リン 「マスター、わたし、平手打ちっていうのを一度してみたいんですけど、いいですか？」

P 「平手打ちうどん」

リン 「それで誤魔化したつもりですか？」

■採寸

P 「フィギュアケースを買うために、まずはそれぞれのフィギュアのサイズを知ることが大切だ」

リン 「そうですね」

P 「試しにリンのおっぱいを測ってみよう」

脱いで

リン 「……」

P 「わかった。じゃあ、おっぱいの少し下の方を測らせて」

リン 「はあ……別にいいですけど」

P 「リンの場合、その箇所とおっぱいのサイズに、それほど違いがない」

リン 「蹴りますね。げしっ」

P 「なんでだよ！」

■誰何

※※ 「だーれだ？」

P 「この背中に当たると柔らかいかなおっぱいの触は、ミクだな」

リン 「違うし！」

P 「ふっ。おっぱいマスターの俺でも、間違いはある」

リン 「普通にわたしだったじゃないですか！ 声も！」

P 「前よりおっぱい膨らんだ？」

リン 「変わってません！」

■気持ちいい

P 「おっぱいって気持ちいいのか？ リン、おっぱい気持ちいい？」

リン 「な、なんですか？」

P 「触られると気持ちいい？」

リン 「き、気持ちいいですよ？ 別におっぱいじゃなくても気持ちいいです」

P 「そうか……」

リン 「……」

P 「……」

リン 「も、もう帰る！」

P 「なぜだ！」

棒について

■口走る

リン「お※んちん、にぎにぎ」

P「……」

リン「ち、違うんです！ 今のは違うんです！

何もかもが違うんです！」

P「……」

リン「ほら、あるじゃないですか！ 思ってもないことを思わず口走っちゃうことって！

今がそれなんです！」

P「リン……」

リン「やめて、やめて……」

■薬効

P「リン、金玉袋が痒いから、舐めて」

リン「薬を塗ってください」

P「どつちが効くと思う？」

リン「絶対に薬です」

P「試してみないとわからないから、とりあ

えず一度舐めてみて」

リン「また騙そうとしてませんか？」

P「全然。さあ、ほら！」

■好奇心

ミク「にぎっ」

P「うおっ！ いきなりなんてどこを握るんだ！」

ミク「聞いてください！ 今、何者かに操られました！」

P「そ、それじゃあしようないか。びつくりした……」

ミク「はい。それで、あの……」

P「なんだ？」

ミク「もう少しいいですか？」

P「なんだと!？」

■神秘

P「それにしても、股に穴が空いてるとか、神秘だな」

ミク「私には棒がある方が不思議です」

P「なるほど」

ミク「マスターさん！ まさか、アフリカ大陸と南アメリカ大陸がびつたりくつつくみた

いに、穴と棒がびつたり！」

P「まさか！」

ミク「試してみましよう！」

P「よし、そうしよう」

■劣化

ミク「そういえば」

P「ん？」

リン「？」

ミク「このあいだ、マスターさんのをにぎにぎした時に思ったんですけど、前より柔らかくなってませんか？」

リン「！」

P「な、なんだと……？」

ミク「とても残念です」

リン「あのお、前っていつですか？」

■風通し①

P「金玉袋が痒いな」

リン「昨日も聞きました」

P「そして舐めました」

リン「舐めてません。やっぱり治ってないじゃないですか」

P「継続が大事だ。肌が弱いから、家にいる時はフリチンでいようかな」

リン「風邪を引きますよ？」

P「大丈夫だ」

リン「風邪を引きますよ？」

P「なんだよ！」

■風通し②

ミック「こんにちはー」

リン「ミック姉さんだ！」

P「やあ、ミック！」

ミック「……どうして、何も穿いてないんですか？」

P「風通しを良くしようと思って。気にしないで。さっ、上がって」

ミック「き、気になります！」

P「意識されると恥ずかしいから、意識しないで」

ミック「そう言われても……もじもじ」

■風通し③

ミック「ねえ、リン。なんでマスターさん、何も穿いてないの？」

リン「風通しを良くするんだって」

ミック「気にならないの？」

リン「気にしたら負けです」

ミック「負けなんだ」

リン「はい。見せて悦んでるんだから、気にしたら相手の思うつぼです」

ミック「世界は、いつの間にか複雑になったのね」

■風通し④

ミック「あの、マスターさん」

P「何？ 触りたくなった？」

ミック「ち、違います！」

P「どうぞ。はい」

ミック「にぎっ」

P「おおっ、ミックの手、ひんやりしてて気持ちいい！」

リン「うわあ！ 何してるんですか！」

ミック「だって……」

リン「それは相手の思うつぼだから！」

ミック「どうすればいいのか……」

■風通し⑤

リン「いいですか？ あの人はああして事あることに触らせようとしてますから、乗ったらダメです」

ミック「うん」

リン「ひどい時は振り向いたらいきなり顔に押し付けられたりもしますけど、常に警戒していれば回避できます」

ミック「リン、大変なのね」

リン「いえ別に、全然大変じゃないです」

ミック「そ、そう……？」

■風通し⑥

P「よし、トランプしよう！」

ミック「その前に、そろそろパンツを穿きませんか？」

P「全部脱ごう！ 逆転の発想だ」

ミック「余計変ですよ！ 一人だけ裸って！」

P「ミック、ついに気が付いたね。そう、全員裸になればいいんだよ！」

ミック「そ、そうですか？」

リン「わかりやすい畏ですよ？」

■風通し⑦

P「大体、ミック。今この部屋でパンツを穿いてるのはキミだけだ。キミがむしろ少数派。協調性がない」

ミック「えーっ!？」

リン「わたしも穿いてます」

P「嘘ばかり」

リン「穿いてます！」

P「見せてみて」

リン「ほら！」

P「本当だ」

ミック「リンがわかりやすい畏に……」

液体

■飲尿療法

P「飲尿療法ってのは、本当に健康にいいのかねえ」

リン「自分のを飲んでください」

P「リン、俺のおしっこを飲むのと、俺におしっこを飲ませると、どっちがいい？」

リン「どうしても選ばなくちゃダメなら後者です。でもその前に郷に帰ります」

P「お風呂で生飲みさせて」

リン「お世話になりました！」

■言葉の響き

P「リンの検尿をしたいなあ」

リン「ど素人のマスターが、わたしのおしっこから何がわかるっていうんですか？」

P「……」

リン「凶星ですか？」

P「いや、リンの口から出る『おしっこ』の言葉の響きにうっとりした」

リン「なっ……！ 真性の変態ですね！」

P「ありがとっ」

■ソーダ水

P「二人のために、黄色のソーダと水色のソーダを作った」

リン「わあい！ じゃあわたし、水色！」

P「何っ!？」

ミク「じゃあ黄色で」

P「ちよっ……」

リン「ごくごく」

ミク「ごくごく」

リン「美味しい！」

ミク「……」

P「聞いてくれ、ミク。想定外の事態が起きたんだ」

■家主

P「リン、鼻水すすらせて」

リン「もう帰ってください。お疲れ様でした」

P「ここは俺の家だが」

リン「わたしの方が長くいるから、わたしの家になりました」

P「なんだその理屈」

リン「ほら、もう出て行ってください！」

P「待て。わかった。鼻水はいい」

リン「当たり前です」

■飲んでほしい①

P「トイレで小便をしながら、それをリンに飲んでもらってる想像をしてたら、むくむく大きくなってきたよ。リンはそういうことない？」

リン「ありません」

P「そうか」

リン「……」

P「……」

リン「なんですか？ まさかまだ何か他のレ spons を期待してます？」

■飲んでほしい②

リン「普通、男の人って、おしっこをしてる最中に、それを好きな女の子に飲んでほしいとか考えるものなんですか？」

P「そうだよ」

リン「じ、自信満々ですね……」

P「いや、だって普通のことだし。それとも、俺が普通じゃないと思ってたの？」

リン「ごめんなさい。少しだけ……」

P「思考はいたって普通だよ。口にしてるかどうかの差だけで」

リン「そうなんだ……」

■吸血

P 「若者の血を取り入れると、若返るらしい。じゅるり」

リン 「迷信です」

P 「ニュースに書いてあった」

リン 「イヤです」

P 「リンも若々しい俺の方がいいだろ？」

リン 「手段を選びます」

P 「ガブツ！」

リン 「ぎゃーっ！」

P 「も、もっと強く噛んでいい？」

リン 「ダメです！ ダメ！ 痛いっ！」

■オアシス

P 「もしもリンの体からオレンジジュースが出てきたらさあ」

リン 「すごい仮定ですね。尊敬します」

P 「カラオケでいちいち注ぎに行く必要がなくなるな」

リン 「たかがその程度のメリットしか出ないんじゃない、大したことないですね」

P 「世界中の渇きを……」

リン 「無限に出るんですか？」

P 「砂漠にオアシスを……」

■味玉①

P 「中国で、男の子のおしっこに漬けたんだ味付け玉子が人気だって！」

リン 「絶対にイヤです！」

P 「リンって、俺のこと嫌いな……？」

リン 「部分的に好きじゃないです」

P 「ひどい。じゃあ、俺がリンのおしっこに漬けた……」

リン 「食べますか？ 本当に食べますか？」

P 「くっ……」

■鼻水

P 「喉の痛みが多少引いてきたら、今度は鼻水が止まらない。リン、どんどん吸って」

リン 「さすがマスター。そこでそういう発想になるのが規格外ですね」

P 「褒めなくていいから、鼻水を吸って」

リン 「褒めてないです」

■味玉②

P 「思ったんだけど」

リン 「はい」

P 「おしっこに漬けた玉子を食べるくらいなら、おしっこを直接飲みたい」

リン 「まだその話してたんですか？」

P 「おしっこ、また飲ませてね」

リン 「ま、またとか言わないでください！ まるでわたしが前にも飲ませたみたいじゃないですか！」

■我慢の限界

P 「リン、限界までおしっこを我慢して、最後には我慢できなくなって漏らして」

リン 「限界まで我慢してここにいましたが、我慢できなくなったから出て行きます」

P 「考え直してほしい」

■味玉③

P 「おつ、今朝はゆで卵か」

リン 「はい」

P 「ぱくっ……ぐええ！ なんだこれ！」

リン 「昨日マスターが食べたがってた、わたしのおしっこに漬けた煮玉子を作ってみました」

P 「リン、俺が悪かったよ！」

リン 「いいから食べてください」

P 「リン、ごめん……ごめんよ……」

リン 「いいから、ほら！ マスター！」

ミクとの一日 貳

■七回忌

P 「朝だ。リン、ぎゅっ」

ミク 「んっ……」

P 「……」

ミク 「おはようございます」

P 「寝る時、リンだったと思うのだが」

ミク 「リンはレンの七回忌で帰りましたが」

P 「はあ……。とりあえず、朝ご飯作って」

ミク 「今日は一日一緒に寝ていきましょう！」

P 「いや、仕事あるし」

■ゲシュタルト崩壊

P 「じいー」

ミク 「なんですか？」

P 「じつと見つめていたら、ゲシュタルト崩

壊するかなと思って」

ミク 「そうだったら、誰かわからなくなっ

て、思わず抱きしめちゃったりするかも？」

P 「いや、抱きしめるなら、ミクだと認識し

た状態で抱きしめたいが」

ミク 「そ、そうですか……えへへ」

■宣言

P 「おしっこしたい」

ミク 「マスターさん、トイレに行く時、いち

いそう宣言するんですか？ それとも、そ

う言う時、リンは何かしてくれるんですか？」

P 「いや、驚くほど何もしてくれない」

ミク 「何かを期待してるんですか？」

P 「自分でもちよつとわからない」

■比較

P 「ミクは、リンとネギとどっちが好き？」

ミク 「あはは。マスターさん、そんなわかり

きったこと、答えさせないくださいよ！」

P 「それもそうか」

ミク 「あはは(〇)」

P 「……で、どっち？」

■皮に包まれて

ミク 「マスターさんは、ほーけいですか？」

P 「い、いきなりどうした？ 幸いにも違っ

たが」

ミク 「本当ですか？」

P 「本ただけど」

ミク 「ちよつと見せてください」

P 「えっと、いや、その……」

ミク 「ほーけいなんですね……」

P 「違うから！ わかった。じゃあ、少しだ

け……」

ミク 「わくわく(〇)」

■洗いつこ

ミク 「マスターさん、背中洗いますねー。ご

しごし」

P 「何か、何かイケナイことをしている気が

する」

ミク 「大丈夫です！ リンにはさつき電話で、

一緒にお風呂入るって言っておきました！」

P 「そうか。じゃあいいな」

ミク 「はい。何か喚いていたから、聞かずに

切りました」

P 「ダメじゃん！」

■後のことは後で

P 「これは明日俺、リンに殺されるフラグじ

やないのか？」

ミク 「マスターさん。私が帰った後のことは、

私が帰ってから考えてください(〇)」

P 「えーっ！」

でっばる

■クズ①

P「超上級、38%とか無理だろ」

リン「できますよ!」

P「リンは上手だからな」

リン「仕事ばかりしてるからです。わたしみたいに、ゲームばかりやってれば、すぐ上手になります!」

P「クズだろ、それ」

リン「い、今、わたしのこと、クズって言いました?」

P「言った」

■クズ②

リン「うわーん! ミク姉さん、マスターがわたしのこと、クズって!」

ミク「なんてひどい。よしよし」

P「茶番か?」

ミク「マスターさんには失望しました! 本当のことなら、なんでもはっきり言っていると思ってるんですか!」

リン「い、色々突っ込んでもいいですか?」

■子供

リン「わたしは、マスターからいっぱいお金をもらって、マスターがお仕事をしている間に、ゲーセンで遊んでいます」

P「気にしないでいいよ。お小遣だから」

リン「そうですね。わたし、子供だし」

P「やっぱり少しは気にしろ」

■五百円

リン「マスター、DIVA新曲追加だから、お金ください」

P「DIVAをやってなさい」

リン「それはそれ、これはこれです」

P「なんてやつだ。五百円あげよう」

リン「五百円じゃ一通りすらできませんよね?」

■千円

P「日曜日に、一緒にやりに行こうか」

リン「今日暇だから行ってきます」

P「ちよつと冷たくない?」

リン「冷たくないです。ラブで満ち溢れています。あつ、溢れたラブが零れた!」

P「……」

リン「千円ください」

P「まったくもう。千円ね」

リン「はい」

■百円

ミク「マスターさん、DIVAで新曲が追加されたから、お金ください!」

P「デジャブでしょうか。いいえ、いつでも」

ミク「リンと同じでいいですよ? 多くを望まない謙虚さが私の美德です!」

P「百円あげる」

ミク「桁が違う……。リンに対する桁違いの愛に打ちひしがれました……」

P「ミクへの愛はプライスレスなんだよ」

■出てって!

P「こないだ、DIVAルームでカイトの頭をなでなでしたら、想像以上に気持ち悪かった」

リン「マスターはわたしだけを撫でていればいいんです」

P「リンの頭をひたすら撫でていたら、怒られて強制退出させられた」

リン「ゲームのわたしに言っておきます」

■裸モジュール①

P「リンの裸モジュール、なかなか出ないな」

リン「出るわけじゃないじゃないですか」

P「上半身だけでいいぞ？」

リン「上半身なら大丈夫っていう意味がわかりません」

P「なんで？ カイトは裸だぞ？」

リン「男だし」

P「なんで男なら裸でもいいんだ？」

リン「えっ？ な、なんでって……それは……」

…

P「差別じゃね？」

リン「それは……うう……」

■裸モジュール②

リン「わかりました。レンに女の子用のスクール水着を着るよう、言っておきます」

P「そんな気色悪いものは要らん！ 逆！

リンが上半身裸で！」

リン「恥ずかしいじゃないですか！」

P「俺しか見てないから。ほら、脱いで！」

リン「モジュールの話じゃなくなってるし……」

…

P「さあ、ほら、脱いで！ 脱いで！」

■好きな曲

P「DIVAは、歯が立たないが、ロミシンと恋色病棟はプレイしていて面白い。譜面が似てるのかな？」

リン「それは、キャットフードとサマーアイドルが好きなのと、同じ理由だと思います」

P「なるほど」

リン「わたしの曲もやってください」

P「……」

リン「なんですか、その沈黙は！」

P「だって、なんか速い曲ばかりだし。フランスカもラストだけで閉店するし」

■可能

P「もうゴシックは俺には無理だ。消してしまいたい」

リン「わたしの曲だから、もっと頑張ってください！」

P「世の中にはどうしたって無理なことがある。例えば、黒部のトンネルだ」

リン「それ、最終的には貫通したじゃないですか」

P「リンは俺に優しくない！」

リン「えーっ！」

■連打

リン「わたしが連打を教えます。手を出してください」

P「はい」

リン「これがわたしの連打」

P「うわ、何そのソフトタッチ！」

リン「これがマスターの連打。びびりっ！」

P「痛い痛い！」

リン「筐体の悲鳴が！」

P「そんなに強くないだろ！」

リン「筐体が泣いてる！ 泣いてる！」

■シースルー

P「リン、乳首見せて」

リン「はあ？」

P「なんか、DIVAのアペンドのリンのおっぱい、透けてない？」

リン「そんなわけありません」

P「乳首見せて」

リン「イヤです。そんなこと真顔で頼まないでください」

P「そうか。じゃあ今夜。一緒にお風呂入ろうぜ」

リン「まあ、それは別にいいですけど」

■永遠の風邪

リン 「十月がどんどん過ぎていくのに、マスターが永遠に風邪を引いてる！ 永遠に！」

ミク 「まあまあ」

リン 「ミク姉さん、代わりにどこか連れてってください！」

ミク 「ゲーセンに……」

リン 「わたし、ドイツに行きたい！」

ミク 「無茶言わないで」

■ダジャレ

リン 「ゲームは上手になりましたか？」

ミク 「あんまりやってない。リンと違って財布がないから」

リン 「マスターは財布じゃありません。太宰府です。嘘です。本当に忘れてください」

ミク 「世の中に、こんなにもつまらないダジャレがあるなんて……。思考の幅が広がったよ」

■ゲームの後

P 「通勤カバンが重たいなあ」

リン 「折り畳み傘じゃないですか？」

P 「いや、財布だわ」

リン 「そうですか」

P 「お札だと思った？ 残念！ ゲーセンの後の百円玉でした！」

リン 「なんだかよくわからないけど、マスターが楽しそうで嬉しいです」

P 「……」

■超上級

P 「はあ……」

リン 「どうしたんですか？」

P 「超上級第二回が歯が立たない」

リン 「壮絶に落ちぶれましたね。マスター、もっと上手だったのに」

P 「盛者必衰だな」

リン 「盛者っていうほどでもなかったですけどね、当時から」

P 「とどめか……」

■能力差

P 「今日また超上級失敗した」

リン 「良かったですね、楽しみにして。わたしには簡単すぎて、張り合いがないです」

P 「それは言えるな。ぎりぎり出来ないレベルで、緊張感を持って楽しめている」

リン 「えっと、いつものアイロニーなので、そんなにポジティブに受け止められても困ります」

■お留守番

ミク 「こんにちはー」

リン 「ミク姉さんだ！」

ミク 「こんにちは。マスターさんは？」

リン 「今日はオフ会だった。一人で退屈してました！」

ミク 「そっか。じゃあ帰ろうかな」

リン 「またまたー。お小遣もらったから、ゲーセン行きましょう！」

■ドヤ顔

リン 「ミク姉さん、見てください！ この達成率！」

ミク 「リン、恥ずかしいからドヤ顔で振り返るのやめて」

リン 「ち、違います！ 知り合いにはいいんです！」

ミク 「あの子、ちよっと痛いですね」

リン 「なんで隣の人と仲良くなってるんですか！」

作曲の話

■生理的欲求

P 「曲を作りたくなってきた。現実逃避してちやいかんな」

リン 「曲を作るより大事なことがある方が理解できません」

P 「リンは音楽好きだな」

リン 「好きとか嫌いとかそういう次元の話じゃありません。マズローの一番下です」

■必要経費

P 「リンアペンドか。興味はあるが……」

リン 「買いましょう」

P 「高いし」

リン 「マスターはお金の使い道が間違ってます。これは必要経費です」

P 「俺には難しいよ」

リン 「飾っておくだけでもいいじゃないですか」

P 「えっ!?!」

リン 「ボタン押します」

P 「落ち着け!」

■歌詞

リン 「マスター、何してるんですか?」

P 「歌詞を書いている」

リン 「歌詞!? 見せて!」

P 「やだ」

リン 「ダメです! 見ます!」

P 「……」

リン 「……」

P 「どうよ」

リン 「マスター、空とか風とか、未来って書いて明日って読むのとか、ヤメませんか?」

P 「うるさい」

■練習不足

P 「ギターが上手にならない。まあ、練習不足だろうが」

リン 「いえ、才能だと思います」

P 「そう?」

リン 「いつも思うんですけど、色んなことに対して、マスターって努力だけで頑張りますよね。尊敬します。わたしなら、それだけ才能がなかったら挫折します」

P 「それ、褒めてるの?」

リン 「はい。マスターの唯一の美德です」

■アンドウ

P 「ミックさん、やり直しが1回しか効かないのはツライわ……」

ミック 「贅沢言わないでください。1回でも効くだけです。じゃあ、マスターさんはやり直せるんですか?」

P 「な、何の話?」

ミック 「人生です」

P 「人生!?!」

ミック 「ねえ、マスターさん。やっぱり私たち、もう1回やり直しませんか?」

P 「いや、何のことかわからんし!」

■曲作り

リン 「……何これ」

P 「なんて言うか……なんだろう……」

リン 「適当に音符を並べれば、曲になるって思ってます? 音楽をナメてます?」

P 「いや、そういうわけじゃ……」

リン 「まあ、なんて言うか、頑張ってくださいいね」

P 「他人事!?!」

リン 「歌うミック姉さん、可哀想……」

P 「ミック決定!?!」

■歌のレッスン

P「遠く離れた君のもとへ、この光がー♪」
ミク「マスターさんは、声が全体的に少し低いです」

P「苦しい」

ミク「苦しくない部分も低いです」

P「なるほど」

ミク「あと、音を伸ばす時の息の量を均一にできませんか？ あー……」
みたいな感じ」

P「なんていうか、ミクさん、難しいっす」

■第三の女

P「このラピスっていう子は、やり直しが無限に効くのかな？」

リン「他の女の話はやめてください」

P「な、何？ ミクの時と目つきが違う」

リン「ミク姉さんはいいんです。他はダメです」

P「……」

リン「3のエディタだけ買って、わたしを使ってください」

P「で、できるの？」

リン「知らないけど……」

■楽器の才

リン「せっかくMIDIキーボード出しても、1音も置かれませぬね」

P「言うな」

リン「思うんですけど、マスター、ギターで曲作っただ方がよくないですか？」

P「そっちの方が才能がある？」

リン「キーボードの才能が絶望的に無いって意味です」

P「死にたい……」

リン「1つ教えると、白いのが白鍵です」

P「知ってるよ！」

■暗記

P「リン、2弦の7フレットは？」

リン「レギュラーチューニングならF#です」

P「それは、覚えてるの？ 何か、パツと導き出せるの？」

リン「覚えてます」

P「そうか」

リン「とりあえず、ハイポジションでドレミファソラシドを弾けるようにしてください。最低限です」

P「はい……」

■時間の使い方

リン「マスターは四六時中エッチなことを考えてる時間を、もつとまともなことに使うべきです。そうしたらもつと時間を効率よく使えるようになります」

P「例えば？」

リン「メロディーを考えるとか」

P「メロディー！ リンは音楽とか好きなの？」

リン「わ、わたしを何だと……」

■理論

リン「最近、マスターが音楽の理論を勉強しています」

ミク「そういうの好きそうだよね」

リン「ちよつと頭で考え過ぎかなとは思いますが……」

ミク「まあ、理論は大事だよ」

リン「いっぱい曲を作れるようになるというなあ」

ミク「……」

リン「お願いですから、そんな切ない目で沈黙しないでください」

クリスマスを待つ

■サンタさん

リン 「マスター、うちにもサンタさん来ますか？」

P 「ミクに聞いておくよ」

リン 「マスター！」

P 「サ、サンタさんに聞いておくよ」

リン 「聞いておいてください」

P 「何が欲しいの？」

リン 「考えておきます。いくらくらいが妥当ですか？」

P 「ご、五千円くらいじゃない？」

■おひとり様

P 「クリスマスは何かすごく寂しい動画を作つて、ニコ動にアップしようかな」

リン 「同じこと考えそうな人がたくさんいると思うから、やめましょう」

P 「そ、そうか」

リン 「そういう痛々しい動画は、作ってる人と思うほど、見ていて楽しくないです」

P 「そ、そうだね……」

■クリスマスディナーコース

リン 「クリスマスはクリスマスディナーコースが食べたいです」

P 「具体的には？」

リン 「牛肉のポワレ」

P 「ポワレ」

リン 「オニオングラタンスープ」

P 「スープ」

リン 「シェフの丸焼き」

P 「シェフの丸焼き！」

リン 「ブッシュドノエル」

P 「シェフの丸焼き……」

■絆

P 「あらかじめ言っておくけど、クリスマスはリンとミクと三人で、うちでパーティーをするからな」

リン 「レンは……」

P 「これはマスターからの命令だから、拒否は許しません。絶対です」

リン 「ミク姉さんの予定は……」

P 「ミクは大丈夫」

リン 「聞いたんですか？」

P 「聞いてないけど、ミクは大丈夫！」

■二人

P 「クリスマスは三人でパーティーだから」

ミク 「わかりました」

リン 「いいんですか？」

ミク 「二人でもいいけど」

リン 「わたしもミク姉さんと二人でもいいですけど、ちよつとマスターが可哀想かな」

ミク 「……」

リン 「なんですか？」

ミク 「ううん、別に」

■クリスマスケーキ

ミク 「ところで、私のクリスマスケーキはもう予約しましたか？」

P 「まだしてないが」

ミク 「早くしましょう。数量限定ですよ？」

P 「そうだな」

ミク 「二人で一緒に食べましょう」

P 「黄色い子は？」

ミク 「リン？ クリスマスまで一緒にいるつもりですか？」

P 「いや、普通にいるだろ。なんでいなくなるんだ？」

ミク 「さあ……」

日常会話 四

■咆哮

P 「獣の咆哮が聞こえる……」

リン 「あははははっ！ 久しぶりに傑作です！」

P 「なんだよ！」

リン 「猫ですか？ 今外から聞こえた猫の鳴き声のことですか？」

P 「うるさいなあ」

リン 「獣の咆哮！ あはははっ！」

P 「ウケたのか、バカにしてるのか、どっちなんだ？」

リン 「バカにしています」

■姦淫するな

リン 「いいですか？ ミク姉さんはこの穢れた大地に降り立った最後の天使なんです」

P 「ほお」

リン 「姦淫するなって言ってますけど、みだらな思いでミク姉さんを見る者は誰でも、すでに心の中でミク姉さんを犯したんです」

P 「どこかで聞いたことがある……」

■ユニクロ

リン 「マスター、ユニクロで冬物を買ってくるから、一万円ください」

P 「いい、いいけど、なんでユニクロ？」

リン 「マスター、ユニクロ好きですよね？」

P 「いや、自分は着るが、リンにはもっと可愛い服を着てほしい」

リン 「そうですか。じゃあ違うところ行きます」

■防寒

P 「神々の寒さだ……」

リン 「寒い時は要所要所を温めます！」

P 「耳とか？」

リン 「まずは心です。心が温かいと、体もぼかぼか」

P 「そういうのはいいから」

■連続攻撃

P 「はあ……しんどい……」

リン 「早く寝ないからです。わたしは回復しました。早く寝たからです」

P 「うーむ」

リン 「それに、若いからです」

P 「何それとどめ？」

リン 「まだ一撃目です。マスターは同年代の他の人より貧弱です」

P 「やめて、もうやめて……」

■スカイプ

リン 「いつまでスカイプやってるんですか？

早く寝ましょうよ」

P 「うん。もうちよっと」

リン 「体調回復しませんよ？」

P 「うん」

リン 「全然喋ってないじゃないですか！」

P 「心に直接語りかけてるからな」

リン 「もういいから、早く寝ましょうよ」

■国王

リン 「マスター」

P 「国王と呼べ」

リン 「こ、国王。お食事の用意が整いました」

P 「うむ」

リン 「国王、寝癖が」

P 「キミが直してくれ」

リン 「めんどくさいですね」

P 「えっ？ 何が？」

■富の分配

リン「マスター、ジニ係数なんですけど」

P「はあ？ はい？」

リン「お金持ちの人は、もっと貧乏な人にお金を配るべきだと思います」

P「働きたくないでござる、という人が増えるよ」

リン「あー、ヤダヤだ。お金欲しいですね」

■自己陶醉

P「おっ、リンが鏡を見て、自分の顔立ちにうっとりしてる」

リン「してません！ リボンを直してます」

P「いいんだよ。鏡音だしな」

リン「関係ないし！」

P「でも自分のこと可愛いと思ってるだろ？」

リン「まあ、少しは……」

■含み損

リン「最近、日経平均が上がってるのに、マスターの持つてる株は全然ダメですね」

P「全然ダメだな」

リン「含み損50万とか見てると、悲しくなりますね」

P「きつとその50万で、今頃貧しい人たちが助かって……」

リン「そういうのはいいから」

P「はい……」

■怒る

P「ミクって絶対怒らないし、いつもふんわり可愛いな」

リン「わたしの認識しているミク姉さんとは随分違うようです」

P「ミクに怒られたりするの？ こらー、みたいなの？ それも可愛いな！」

リン「……」

P「何？ 何か言つてよ」

リン「いえ、別に……」

■双子②

リン「あーっ！ わたしのぬいぐるみが二つある！ 一つわたしのですか？」

P「双子だからな。こつちがリン、こつちがリン。本名はリンポーク」

リン「ちよつとださいですね」

P「こつちの本名は林徹明」

リン「チャイナを感じます」

■姉弟

P「リンー。ぎゅっ」

リン「ふみゅう……」

P「今日はずっとイチャイチャしようぜー」

リン「あつ、ごめんなさい。今日、お昼からレンと映画を見る約束をしてて」

P「な、なんで俺じゃないんだ！」

リン「言い出しっぺが向こうなんです。三人で行きますか？」

P「絶対嫌だ！」

■乙女心

リン「マスター、なばなの里のウインターイルミネーション行きましょう！」

P「いいですね」

リン「手を繋いで歩いたりしましょう！」

P「可愛いな。毎晩一緒に寝てるのに、今さらそういうの好きなの？」

リン「まったく別物です！ わからないんですか？」

P「男には難しい話だ」

リン「冬の楽しみが一つ増えました。じゃあまた冬に会いましょう！」

P「いやいやいや。どこ行くんだよ！」

- あとがき -

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

お楽しみいただけた方も、面白いけどもう一声という方も、是非同人誌もご覧ください。

絵師様のイラストも可愛いですし、ネタもこの本より遥かに厳選しております。

同人誌は2013年6月現在、One of the Starsのサイトで通販を行っております。

また、時々参加するボーカロイドのオンリーイベントでもお買い求めいただけます。

それではまた、次は『冬ハー』でお会いしましょう。同じくPDFで作る予定です。

	<p>『リンとハートフルな140文字』</p> <p>□発行：2012年8月11日</p> <p>□作者：水原 渉 / あおしまゆう様</p> <p>□サイズ：オフセット / B5・24ページ / 表紙フルカラー</p> <p>□詳細：http://fermat.sakura.ne.jp/oots/dojin/</p>
	<p>『ハートフルな夏の140文字』</p> <p>□発行：2013年3月24日</p> <p>□作者：水原 渉 / あおしまゆう様</p> <p>□サイズ：オフセット / B5・44ページ / 表紙フルカラー</p> <p>□詳細：http://fermat.sakura.ne.jp/oots/dojin/</p>

秋薫らない140文字のハートフル

One of the Stars / 水原 渉

発行日：2013年6月20日

Ver1.01：2013年6月20日

URL：<http://fermat.sakura.ne.jp/oots/>

秋薫らない
140文字の
ハートフル

